

清末小説から 121

2016.4.1

いくたびかの阿英目録13.....樽本照雄 1

日本語訳『海上大冒険談』の底本.....神田一三 9

《毒美人》等原著鑑定及《東方雑誌》佚名譯者身份研究.....古 二 徳17

漢訳『奇獄』の謎 3 結論検証篇(上).....沢本香子30

漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序 1 「区別がつかない論」再び.....樽本照雄40

清末小説から29、49

清末小説研究会全ファイルを掲げました。人によってダウンロードできないと連絡があります。中国国内で通信状況が異なり、そうなるらしいです。なんとか各自で工夫をお願いいたします

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

いくたびかの阿英目録13

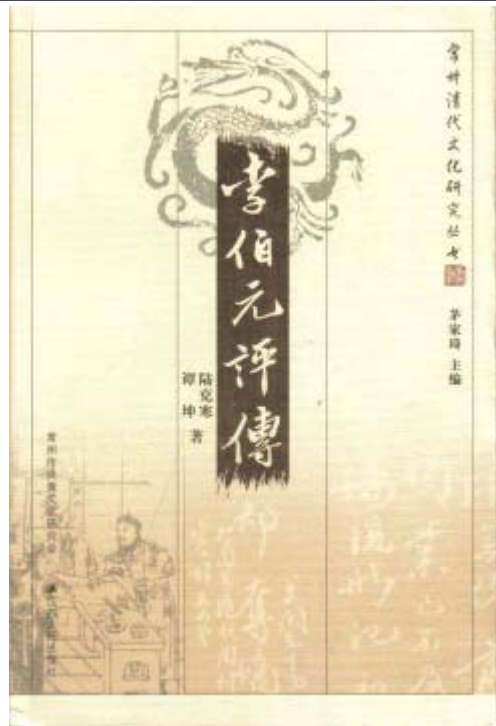
樽 本 照 雄

李伯元研究で留意すべきいくつかの要点

陸克寒、譚坤著『李伯元評伝』について

李伯元の小説関係に問題を絞る。そこには、事実として存在するいくつかの注目点がある。研究というならば、それらを避けて通ることができない。項目を列挙して以下のとおり。

1 李伯元と『繡像小説』の関係 主編問題



陸克寒、譚坤著『李伯元評伝』
南京・鳳凰出版伝媒股份有限公司、江蘇人民出版社
2012.12 常州清代文化研究叢書

2 『繡像小説』の発行遅延問題

3 李伯元死去と彼の作品の関係

4 『官場現形記』海賊版についての裁判問題

5 李伯元と劉鉄雲の関係 特に「文明小史」と「老残遊記」の改竄没書事件と盗用事件

6 李伯元と歐陽鉅源の関係

陸克寒、譚坤著『李伯元評伝』(2012。以下著者を陸譚とする)は、それらについてどのように説明しているか。本稿の目的はそれを点検することにある。注目点の内容を簡単に説明することからはじめよう。

1 主編問題

『繡像小説』は、上海の商務印書館が創刊刊行した小説専門雑誌だ。中国最初の小説専門雑誌『新小説』は、梁啓超が亡命先の日本で創刊した。それに影響を受けたといっている。日本が中国近代小説専門雑誌発祥の地だといえれば不思議に思う人がいるかもしれない。清末の中国文学は、日本との関係を除外しては説明できない。誰も無視して書かないが、それが事実だ。

『繡像小説』は半月刊ではじめられた活版線装本小冊子である。全72冊を出して停刊した。

その編集長(主編と称する)は李伯元だ。阿英がはやくから指摘していた。それが学界の長年にわたる定説だった。研究者はそのままをくりかえした。雑誌のどこにも、主編が李伯元(南亭、南亭亭長)だとは明記されていない。だが、阿英の説明に疑問を持った人はいない。

1982年だった。当時商務印書館に勤務していた汪家熔が、李伯元主編説を否定する論文を発表した。李伯元は主編ではないという。

そう主張する彼の根拠は、こうだ。発行元である商務印書館の編訳所を主宰していた学者の張元濟が、花柳界の支配人という「悪名高い」李伯元を主編に招くはずがない。

汪家熔は、それを証明する直接証拠を持っていたわけではない。あくまでも状況証拠にすぎなかった。李伯元でなければ誰か。汪家熔は、

かわりに夏曾佑を持ち出した。1983年にも同論文を別の雑誌に重ねて公表し強調した。

反論したのは樽本だ。該誌に連載していた李伯元の「文明小史」が劉鉄雲の「老残遊記」から一部の内容を盗用することができたのは、李伯元が該誌の主編だったからだ。これが反論の主旨である。

反論の文章は中国の全国紙『光明日報』に掲載された。日本人が中国人の論文を名指しして批判したのだから注目を集めたい。今から考えれば、『光明日報』は樽本の文章をよく掲載したものだと思う。中国人研究者鄭逸梅の意見を同時に登載したのは、確認が必要だからだろう。汪家熔は同紙に反論を寄稿し、樽本説とは逆に劉鉄雲が李伯元を盗用したと真っ向から批判した。汪家熔は、自説に都合のいい箇所のみを取り上げて反論しただけ。『繡像小説』発行遅延説が出てくる前のはなしだ。

そのやりとりがよほど興味深かったとみえ、中国の『出版史料』が主編問題の特集を組んだくらいだ。こうして『繡像小説』主編問題論争は、日本と中国で長年にわたって継続された。

論争の当初から、李伯元と『繡像小説』および作品2本の盗用事件が、からみついていることがわかる。後に『繡像小説』発行遅延説が、張純により加えられた。全体の様相はより複雑になったといえる。汪家熔は、最後まで樽本の反論を受け入れなかった。李伯元主編を証明する複数の資料が新しく提出された。しかし、彼は理由にもならないことを述べてそれらを否定し続けた。なぜそのような資料があるのかという基本問題を考えようとはしなかったのだ。

2001年、決定的な資料が出た。論争開始から17年後のことである。新聞の出版広告だ。劉徳隆が発見し、樽本が確認した。

すなわち、商務印書館の自社広告に『繡像小説』の主編は李伯元だと公表していた。普通はこれを「動かぬ証拠(鉄証)」という。新聞広告の複写を汪家熔に送ると、彼から返答があっ

た。樽本の指摘する通りかもしれない、と。しかし、それは私信の中だけであった。汪家熔は、公にはその事実を認めなかった。反論さえした。普通に考えて理解しがたい。実物の証拠資料を否定するのは、研究者がとるべき態度ではない。誤りを認めるとそれまでの自己が否定されると考えたのか。汪家熔にとっては、もはや研究ではなくひとつの信仰だったと理解できる。

さらに2014年、樂偉平が張元済の夏曾佑にあてた複数の手紙を発掘し公表した。そのうちの1通は、商務印書館が李伯元に援助を求めているという内容である。『繡像小説』を創刊する以前に書かれた手紙だ。該誌の主編について述べたものにほかならない。

張元済書簡の宛先が夏曾佑であるところに注目されたい。夏曾佑こそは、汪家熔の考えによれば該誌の主編であるべき人物だ。汪家熔が主張するように夏曾佑が雑誌主編であるのなら、張元済が彼に李伯元について知らせる理由がない。

李伯元にかわる夏曾佑を提出した汪家熔の主張は、複数の資料によって完全に否定された。

『李伯元評伝』は、王学鈞編著「李伯元年譜」(薛正興主編『李伯元全集』第5巻1997)に多くを依拠している。

専門家の王学鈞は、当然ながら『繡像小説』主編問題を取り上げている。それにもかかわらず『李伯元評伝』は、無視する。説明しない。陸譚の記述を列挙しよう。

「主編《繡像小説》」(42頁)、「他即被聘為這份小説專刊的主編」(75頁)、「他主編《繡像小説》」(77頁)、「主編《繡像小説》」(117、127頁)、「聘李伯元為主編」(145頁)、「李伯元受聘為主編」(273頁)

李伯元が該誌の主編であることだけを言う。あたかも主編問題が存在しないかのようだ。あるいは、問題が解決していることを知っているから(そうは見えないが)あえて言及しなかったのか。しかし、言及しないことは、知ら

ないことと結果は同じだ。

2 発行遅延問題

『繡像小説』の発行遅延問題について中国学界は、最近までほとんど注目しなかった。

該誌は、第13期より発行期日を掲載しなくなる。この事実を研究者は知らない。雑誌の実物で確認していないのだろう。

月2回の刊行が守られた。李伯元の死去をもって停刊した。阿英がそう説明したのを研究者のほとんど全員がこれも鵜呑みにしている。中国において阿英は研究の権威である。疑問をさむ人はいない。私は雑誌目録を作成したとき、空白部分に刊行されたはずの月日を記入してみた。すると第72期は丙午1906旧暦三月になる。李伯元の死去と月まで一致する。なるほど阿英説は正しいと思ったものだ。1986年に張純がそれを否定した。該誌は発行が遅延していたと指摘したのである。私は張純の指摘を支持し、新聞広告を資料に使い今ではより精密に遅延状況を明らかにしている。

王学鈞「李伯元年譜」は、張純が提出した発行遅延問題を視野にいれている。さすがに、海外の研究状況にも詳しい王学鈞だけのことはある。日本の研究論文も参照している。ただし、遅延の可能性を認めて言及してはいるが、具体性を欠いておりもう一步の深さが無い。具体性というのは、従来いわれていた発行月日からどれくらい遅れていたかを説明することだ。1997年時点での王学鈞は、発行時期のズレを明確にする資料を所有していなかった。

それどころか逆行する部分もある。たとえば、「文明小史」第60回で完結した『繡像小説』第56期の刊行を「乙巳七月」(1905)とありもしない期日を述べる(208頁)。実をいえば、その十ヵ月後の「丙午1906閏四月」あたりに第56期は刊行された。この月日を見ただけで、それは問題だと気づく研究者はほとんどいないだろう(後述)。

依拠した先行文献がそうだから、『李伯元評伝』の記述も同じように迷走するほかない。

「文明小史」の連載時期を「1903.^マ5-1905.^マ9」(117、118頁)とする。「1903.5」は新暦旧暦混用だ。ならば後者は「1905.7」と書かなくてはならない。第56期の刊年をそう書いたところで誤りは誤りだ。

275頁で、本年(1905)9月、「文明小史」が『繡像小説』での連載を終了した、とするのも同じく間違い。

『繡像小説』の終刊は李伯元の死去によってもたらされた。これが阿英による定説だった。陸譚も『繡像小説』が定期刊行を保持していたと考えているらしい。だが、それとは矛盾した説明をしている部分がある。

李伯元病没後、吳趼人と歐陽鉅源が「活地獄」の続作を執筆した(83頁)。

李氏逝去後、吳趼人は第40-42回を続作し、歐陽鉅源が第43回を続けて、これも『繡像小説』に掲載した(117頁)。

奇妙である。李伯元が死去して『繡像小説』は終刊となった、と陸譚は考えているのではないのか。死後も該誌は継続刊行されたことになる。つじつまがあわない。

王学鈞がせっかく提示している手がかりだった。陸譚はそれを利用して問題を追究しようとはしなかった。日本における研究成果にはさらに興味がなかったらしい。

3 死去と作品

『繡像小説』の発行遅延問題は、李伯元の死去と密接な関係がある。

李伯元は、自分の肺病を広告して『世界繁華報』に掲載した(陸譚の言及はない)。上海で逝去したのは、その約一ヵ月後の1906年旧暦三月十四日だった。その時、『繡像小説』は第54期までしか刊行されていない。新聞広告を資料に使えると出てくる解答だ。これが具体的でしかも事実なのである。一ヵ月半にわたって休刊し

た後に第55期が続刊された。それには李伯元が執筆した(ことになっている)「文明小史」第59回、「活地獄」第29回が掲載されているのだ。死者が原稿を書くだろうか。

研究者のなかには、李伯元は原稿を書きためていたという人がいる。ただの推測でありその証拠はない。李伯元は自ら肺病広告を出すほどの病人だった。原稿を書く体力があったとは思えない。かりに書きためていたならば、なぜ雑誌の休刊が一ヵ月半にわたるのか。原稿があれば『繡像小説』の刊行を中断することなく続けることができたはずだ。だからこそ、空白の期間は、もともと李伯元の原稿が存在していなかった証拠となる。

「文明小史」「活地獄」などは、李伯元の執筆ではない部分を含む。それを李伯元ひとりのものとして論じることは、すでにその研究基盤が崩壊している。それを考えずに陸譚は『李伯元評伝』を書き進めた。

4 海賊版裁判問題

李伯元の『官場現形記』は、新聞連載(分冊刊行)途中であるにもかかわらず海賊版12回本1冊が出現した。別のいいかたをすれば、それくらい読者の人気を博したのだ。李伯元の世界繁華報館が海賊版作成者を上海租界の裁判所に訴えたのは、1904年のことだった。この時、「官場現形記」はまだ完結していない。

前出王学鈞の「李伯元年譜」は、裁判を1905年の出来事にした(208頁)。それ以上に詳しいことは述べない。当時は資料がなかったからだ。

すると『李伯元評伝』もそれに依拠して、「本(1905)年、『官場現形記』の海賊版が作られ、李伯元は版權を守るため租界の会審公廨(裁判所)へ提訴した」(275頁)と書く。

海賊版事件の経緯と裁判の結果は、その後の研究によりすでに判明している。『李伯元評伝』出版の前だ。本稿では主として筆者と論文名だけを示し要約する。詳細は次を見られたい

(樽本「注目点4:『官場現形記』の海賊版」
『清末小説から』第119号 2015.10.1)

資料となったのは、新聞の出版広告だ。劉穎慧「李伯元《官場現形記》版權訴訟始末」(2006)が、世界繁華報館と海賊版を製作販売した日本知新社の出稿した新聞広告を追跡した(関連していえば知新社本の書影は『清末小説から』第115号に掲げた)。そうすることにより両社の応酬と裁判の日時が明らかになった。事件は、中国人支配人席粹甫が逮捕処罰されて終結する。

席粹甫が出した海賊版の広告には、ひとつの特色がある。「日商朝日洋行」「日本知新社」「日本知新社主人弼本氏」「東京金港堂」などの固有名詞をちりばめていることだ。「日本」を強調していることは誰にでもわかる。金港堂は実在する。しかしそれ以外は架空の存在である。海賊版を販売するために席粹甫がでっちあげた。

新聞広告を発掘したのは劉穎慧が努力した成果だ。事件の経過について、広告から得られる事実をそのまま記した。高く評価できる。ただし、最後の詰めがなされていない。裁判だから一般の新聞記事も掲載されているだろうという学問的想像力を持たなかった。結局は広告だけしか見ていない。真相は目の前だったのだが到達できなかった。

私は、中国から新聞のマイクロフィルムを取り寄せた。それができる研究状況に変化している。以前には想像もできなかったことだ。

探せば、世界繁華報館と日本知新社の広告以外にも記事がある。裁判結果を報道する新聞記事だ。複数の新聞紙に見つけた。そこには中国人支配人席粹甫が日本人になりすまして海賊版を作成販売したことが書いてある。これが真相だ(樽本「『官場現形記』裁判の真相 日本を装った海賊版」2008)。中国人による擬装、なりすましが真相であり問題の核心である。ここにご注目いただきたい。

以上の論文は、陸譚が『李伯元評伝』を執筆する以前に公表されている。見るつもりがあればそこにあったのだ。調査する努力を怠った。

劉穎慧の指導教授陳大康も、新聞広告のみを材料にして複数の文章を書いた(陳大康「論近代小説伝播中の盜版問題」2015が最新のもの)。私が指摘しているにもかかわらず、陳大康も判決を報じた新聞記事は探さなかったらしい。調査が不足している。しかも海賊版を主題にしていながらその海賊版そのものも見えてはいない。見ていれば説明するはずだ。

陳大康は犯人が出稿した新聞広告のみに依拠している。ゆえに中国人が日本人に擬装したという事実を知らない。だから、「日商朝日洋行」「日本知新社」「日本知新社主人弼本氏」が消えてしまったことを不思議に思い大きな不満を感じる、と以前は書いていた。

かさねていうが、日本人になりすました中国人の席粹甫が真犯人であるからには、裁判から日本が消失するのは当然ではないか。おまけに朝日洋行、知新社、弼本氏は架空の存在だ。不満の表明は、事実および問題の核心を知らない陳大康の限界を示している。

陳大康は、以前と異なりこのたびは一步踏み込んだ。裁判記事も知らないまま新しく彼独自の見解を提出したのである。すなわち、日本東京金港堂が海賊版作成の犯人だという(「盜版者是日本東京金港堂，運往中国代銷的是朝日洋行知新社」166頁)。

その主張に私は驚いたというよりも、あきれたのだった。

陳大康は、よりによって日本金港堂が犯人だと断定した。

当時、上海商務印書館は、東京金港堂と合併会社であった。陳大康がこの事実を認識していないことが露呈する。知識不足だ。彼は何も知らないからこそ、日本金港堂を主犯に指名した。知っていれば、できるはずがない。陳大康は広告に見える単語を単に組み合わせて想像をふく

らませ、証拠もないのに断定しただけ。

商務印書館は『繡像小説』を創刊し刊行していた。その主編が張元済に招かれた李伯元その人だ。合弁相手である金港堂が、関係者である李伯元の書く「官場現形記」(連載途中)をなぜ無断で製作販売する必要があるのだろうか。常識的に考えて、ありえない。李伯元からいえば、金港堂は彼が主編をつとめる雑誌の版元との合弁会社だ。その金港堂が海賊版を製作したことになる。そうならば、内部にいる李伯元が知らないはずがなかろう。内部で処理できる問題だ。外で裁判沙汰にしたということは、金港堂は無関係だということだ。

陳大康は、根拠がなく見当違いの、つまり妄想、捏造を主張している。

中国人の席粹甫が日本人に擬装して海賊版を作成販売したのだ。日本金港堂は、犯人によって宣伝材料に使われた。金港堂にしてみれば名前を無断借用された被害者である。ところが、陳大康は金港堂を逆に加害者だと証拠もなく断定し批判した。妄想、捏造を研究論文として提出した。研究者として致命的な過ちを犯したといわざるをえない。

読めば読むほど奇妙な主張だ。整合性が皆無である。証拠がないところに構築されている。陳大康の妄想、捏造だという理由だ。妄想、捏造ではないというのであれば、金港堂が犯人であるというその具体的な証拠を提出する責任と義務が陳大康にはある。私は何度でもいう。

陳大康は、日本という単語を目にするや脊髄反応して反日を発動させた。立論の手順はこうだ。反日の結論が先にある。日本人が犯人だと決めつける。それを示していそうな材料をさがす。あるのは新聞広告に見える日本金港堂の名前だけである。これを主犯にでっちあげた。陳大康の立論について、清末小説研究会ウェブサイトにおいて以前「独自の角度をつけて」と書いたのはそういう意味だ。陳大康には反日の思い込みが存在していることを指摘しなければな

らない。ここにはもともと公正で緻密な思考は働いてはならず、証拠となる資料を幅広く調査するという研究姿勢がない。立論の中身は、単なるこじつけで妄想、捏造である。

日本金港堂は、現代の中国人研究者陳大康によって濡れ衣を着せられた。新しく作られた冤罪事件が、まさに目の前にある。そればかりか彼は、「これこそが日本人の狡猾なところで(這正是日本人の狡猾之处)」などと根拠のないことを書き、貶めて中傷した。1960年代前後からの中国において見られた捏造論文作成の手法が、現代にも受け継がれている。そう私は理解した。

華東師範大学終身教授陳大康は、『中国近代小説編年史』全6冊(2014)をまとめあげて編集能力の高さを示した。彼は中国学界における第1級の研究者だ、と私は考えていた。だが、『官場現形記』海賊版に関して彼が展開した妄想、捏造はなにだろうか。陳大康は自分から研究者失格を宣言したとしか私には思えない。自ら研究者ではないと主張する。彼は大胆な決断をしたものだ。その勇氣に感心した。

雑誌『文学遺産』は彼の論文を掲載することにより、陳大康が自爆するのを手助けしてしまった。

これほど興味深い話題だ。利用した文献が古くなっていることに気づかない陸譚が、詳細を見逃したのはしかたがない。『李伯元評伝』にとってはまことに惜しいことだった。

5 改竄没書事件と盗用事件

「老残遊記」と「文明小史」のあいだにはなにか問題があるらしい。そう気づいた人がいた。

最初は、劉鉄雲「老残遊記」の単行本と『繡像小説』初出では内容に異なる部分がある、という指摘だった。単行本では「山中の対話」が出てくるが、雑誌初出とは異なっている。そう書いたのは、趙景深「老残遊記及其二集」(1935)だ。文章のなかで調査するようにと指名

された阿英は、1941年に「老残遊記校勘記」を発表した。趙景深の指摘のとおりだと確認して異同部分を詳しく書き出した。

阿英は、さらに1955年にも言及している。李伯元『文明小史』復刻本の「叙引」において、第59回に「北拳南革（北の義和団、南の革命党）」批判が出てくると説明した。李伯元が劉鉄雲と同じく革命に反対していたと書いている。奇妙なことに阿英は、該当する箇所を『文明小史』本文から削除した。彼は両作品間に盗用の事実があると認識していたことがわかる。盗用を明記せず説明もせず該当部分を削除したのは、なぜか。中華人民共和国成立後の思想界において「北拳南革」を批判することはタブーであったからだろう*35。阿英が編集した資料集には、勝手に削除する箇所がたまに出現する。文芸は政治に奉仕しなければならない。なつかしいスローガンだ。それが思考の土台にある。時の政治思潮に合わない過去の記述には、手を加えるという方針だったようだ。資料として利用するときは注意を要する。

1961年の魏紹昌は、趙景深、阿英の名前をださず自分が発見したかのようにあらためて提起した。盗用事件は、こうして研究者にとっては周知の事柄になった。

経緯を私なりに整理し簡単に説明する（詳細は別に述べる）。

『繡像小説』に連載していた「老残遊記」は、第11回の原稿が没書にされた。しかも、その前後が改竄されている。作者の劉鉄雲は原稿執筆を中止する。連夢青を通じてあらかじめ渡していた原稿第14回が雑誌では第13回として掲載された。これが改竄没書事件だ。

劉鉄雲は、友人方葯雨に勧められて『天津日日新聞』に第1回から再度連載をはじめた。『繡像小説』に掲載された本文を底本にして手を入れたのだ。没書になった第11回は下書き手稿にもとづき復元し（劉鉄雲日記）、第15-20回を新しく書き足した。これが初集20回である。

問題はそこで終了しない。同じく『繡像小説』に連載していた南亭亭長（李伯元）の「文明小史」第59回が、没書にした「老残遊記」第11回原稿から「北拳南革」を含めた箇所を盗用している。これが盗用事件だ。盗用の事実を強調したのが上の魏紹昌論文である。魏紹昌はその時、疑問を3点提出したが自分では解決できないと投げ出した。魏が編集した『李伯元研究資料』（1980）にもそれを収録している（180-182頁）。

盗用事件には『繡像小説』発行遅延問題がからんでいる。趙景深、阿英、魏紹昌たちはその事実を知らない。魏紹昌がみずから疑問3点を出しながら自分で解答できなかったのは、ある意味では当たり前だった。その問題が完全に解明されるには時間がかかった（樽本「李伯元と劉鉄雲の盗用事件」の謎を解く」2004）。

時間経過を考慮すれば、改竄没書事件と盗用事件では、関係する人間が入れ替わっている。

「老残遊記」第11回原稿を没書にしたのは、当時の雑誌主編李伯元である。しかし、『繡像小説』の発行が実際には遅延していた。資料にもとづけば、李伯元死後も刊行されつづけていたことがわかる。南亭亭長「文明小史」第59回は李伯元の死後に書かれて雑誌に掲載されたのが事実だ。ならば、「文明小史」を継続執筆して「老残遊記」第11回原稿から盗用したのは歐陽鉅源をおいてほかにはいない。歐陽鉅源が李伯元のあとを継いで『繡像小説』の主編であったからだ。

『李伯元評伝』は122頁で、「劉鉄雲「老残遊記」は前の13回を『繡像小説』に連載し、残りの7回は『天津日日新聞』に連載した」と説明する。誤り。該紙の連載は第1回からだし、復元が1回、新しい追加は6回でなくてはならない。没書についての説明がない。

同じく143頁において、李伯元の小説観を説明して「文明小史」第59回に見える「北拳南革」を引用する。ここは不適切だ。

「北拳南革」は、上記のとおり劉鉄雲が「老

残遊記」原稿第11回で披露した鉄雲自身の意見である。どこをどう間違ったものか『李伯元評伝』は、「文明小史」を出典とした。これこそが「老残遊記」から盗用した部分であることを陸譚は知らないようだ。王学鈞は、「李伯元年譜」203-207頁で当時の資料に基づいて詳しく論じている。『李伯元評伝』はそれにはまったく興味がわかかなかったらしい。

李伯元死後に発表された「文明小史」を立論の根拠とし、そこから李伯元の小説観を抽出することは正しくない。なにしろ「老残遊記」から盗用しそれを執筆したのが別人 欧陽鉅源であるからだ。別人の手になる部分を区別しないで李伯元の小説観を論じることは不可能かつ無意味だ。研究の基礎である*36。

6 李伯元と欧陽鉅源の関係

李伯元と欧陽鉅源の関係が親密なものであったことはよく知られている。作品の共同執筆者であったと私は言い続けている。友人の包天笑は、欧陽鉅源が「文明小史」の原稿に手を入れていたと証言した。だが、『李伯元評伝』は代作については判断するのが困難だ、と否定的だ(87-88頁)。陸譚は『繡像小説』が李伯元の死後にも刊行されていた事実を知らない。代作を疑う理由だろう。

『李伯元評伝』にあげられた引用文献、あるいは巻末の参考文献一覧表を見る。そこには『李伯元全集』、『李伯元研究資料』など基本文献が示されている。だが、それだけにすぎない。主として1980年代以降に刊行された比較的簡単に入手できる書籍に限られている。基本的書籍だけに依拠すれば、それ以上に深い問題に遭遇することはない。それらのなかに、上に列挙した李伯元についての注目点に言及するものは少ないからだ。

例外はある。王学鈞「李伯元年譜」だ。海外の研究成果を取り入れ、李伯元について判明し

ている多くの問題点を指摘している。

王学鈞の説明は、1997年時点のものだ。私の見解と必ずしも一致しているわけではない。現在の研究はより深化しているからだ。しかし、問題があることを明確にしているところを見逃してはならない。『李伯元評伝』の著者陸譚は、それらを無視した。

『李伯元評伝』には、新聞も引用して詳細に説明する部分と、通説によりかかった手抜き部分が混在している。

たとえば、上海図書館所蔵の『指南報』を確認しているのは珍しい。

李伯元は、特別に開催された科挙の一種である経済特科に推薦された。多くの研究者が言及する。『李伯元評伝』も13、272頁でそう説明する。ここまでは普通だ。しかし、同時に吳趸人も推薦されていたと書く文献は少ない。陸譚は、李伯元と吳趸人が同時に推薦されたことをいう(81頁)。ここはよろしい。

「花榜」について詳しく説明している。主たる材料は次の2種類だ。王学鈞編著「李伯元年譜」および陳无我『老上海三十年見聞録』(1997復刻)。さらに『遊戯報』、『世界繁華報』を利用し『忘山廬日記』からも引用する。

花榜とは芸妓コンクールである。ひいきの芸妓に投票する。投票券は李伯元の発行する『遊戯報』に印刷されている。新聞の販売促進拡大に利用された。明治時代の日本で同趣旨の「百美人」が1891年に開催されている。李伯元は日本人とも交流があったからそれから着想したのかもしれない。それとも人間考えることは同じだということか。

研究者は、李伯元と花榜の関係について以前は微妙なあつかいをした。李伯元を批判する時代では、花榜開催を非難の材料に使った。李伯元を正の方向で評価する流れの時は、花榜には言及しなかった。どちらかといえば研究論文では、芸妓に言及することはタブーだった印象が私には強い。資料が不足していたからというこ

とはできる。あるいは花柳界を蔑視する時代の風潮から逃れることができなかったからだろう。いまでは『李伯元全集』があり、陳无我の著作が復刻されている。

『李伯元評伝』が詳細に花榜を紹介したのは、事実を事実として記述できる状況が生じつつあるという反映なのかもしれない。

以下のような俗説を取り入れてもいる(82-83、275頁)。

呉趼人は、病気で死にそうになっている李伯元を見舞った。李伯元は呉趼人に借金をしていたが返済できそうにない。呉趼人は債券を焼き捨てた。王学鈞が紹介している。伝説にすぎない。その病人が李伯元である証拠はない。

小さなことをいえば、75頁で『申報』連載の「乃蘇国奇聞」訳者を李慶国とするのは不可解。以上、いくつか気になる点を指摘した。

私は『李伯元評伝』は研究書だと考えて読み始めたのだった。だが、いくつかの不足があることに気づいた。専門書と考えるから不足が目立つ。一般読者むけの概説書、あるいは読み物だと考えればいい。だからといって間違ったことを書くのはよくない。 罍

【注】

35) 『老残遊記』北京・通俗文藝出版社1956.5にも削除がある。ただし、北京・人民文学出版社1957.10では復元している。

36) 陸楠楠「清末版權意識の萌動 《老残遊記》発表と行世的版權史意義」『新聞と伝播研究』2014年第7期 2014.7.25がある。作家の著作権意識を主題にする。その1例として「老残遊記」と「文明小史」の盗用関係を紹介している。

次号の公開は2015年7月1日を予定しています
清末小説研究会 <http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto>

日本語訳『海上大冒険談』の底本

神田 一三

『海上大冒険談』の底本問題

『海上大冒険談』の翻訳は、図式にすると、英文原本 日訳 漢訳の順で実現している。

漢訳『海上大冒険譚』については、あとで述べる。

本稿の主目的は、日訳に使われた底本を特定することだ。それはすでに判明している、という人がいるだろう。原作者については、はっきりとした記述がある。そう指摘するはず。しかし、それは間違いだ。その誤解が普及しているのには、原因がある。

英文原本は、なにか。結論の一部を先にいえば、該書の原作について日本国会図書館は間違ったことを記載していた。ゆえに一般に存在する目録類も同様に誤る。その誤解が拡散している。

いきなりそう述べても理解しにくいと思う。順を追って説明する。

日訳『海上大冒険談』

問題の出発点は、日訳本である。肝村(兼行)海軍少将校閲、村上濁浪庵(俊蔵)訳述『海上大冒険談』(春陽堂1900.1.1)という。

訳者の村上俊蔵(1872-1924、号は濁浪)は、独立独歩を志す青年を対象とした雑誌『成功』



でも有名。該日誌の発行年を見れば、村上が雑誌社を経営する以前の訳業だとわかる。

架蔵の日誌『海上大冒険談』は、表紙上方に魚が、下方にロープの巻き付いた錨と貝類が描かれている。挿し絵10葉を収録し、本文は162頁だ。該書の表記に従えば、コロンブス、オヘイダ、ヌー子ス、ポーンセ、ガマ、ロツス、ドレーキなど海の冒険者を紹介する物語である。国立国会図書館近代デジタルライブラリーに収録されている。電腦があれば誰でもどこからでも見ることができるはず。そちらにはなぜか表紙がない。その理由はよくわからない。参考までにいえば、別のウェブサイトで袋付きのものを色彩写真で掲げているから探してご覧ください。

日誌者は、「緒言」において次のように解説する(ルビ、傍線省略)。

此書は歐洲最近出版物中、一大珍書との評判高き、ゼ、ストーリー、オフ、ゼ、シーを抄訳せし物に有之候

村上が示したカタカナ表記から推測すれば、原書は“The Story of the Sea”だろう。ただし、著者についての説明はない。

少し調べればすぐにわかる。類似の書物は多い。それらの中のはたしてどの1冊が該当するのか。書名を見るだけではまるで見当がつかない。

底本をめぐる新展開

新しい情報を加えたのは、李艶麗『晚清日語小説訳介研究(1898-1911)』(上海社会科学院出版社2014.8 国家对外文化交流研究叢書)だ。関連部分だけを抽出し、私なりの整理をして以下に示す。



(1902創刊。名誉賛成員に肝村兼行海軍中將の名前あり)、『探険世界』(1906創刊)などを刊行した*1。南極探険隊の支援を行なったこと

[艶麗14-74頁]漢訳作品名を「海上大冒険談」とする/(美) James Fenimore Cooper.

訳者不詳，根據日訳本重訳
 [艶麗14-85頁]「海上大冒険談」J. F. Cooper
 著，村上濁波庵訳述，春陽堂1900年
 [艶麗14-44]漢訳作品名を「海上大冒険
 談」とする / 春陽堂1900。英文原作不記

李艶麗は、英文原作者がクーパーCooperだと書いている。これが新しい。私は知らなかった。どこから入手した知識なのか。典拠は示されていない。李艶麗が独自に調査して到達したのだろう。最初にこれを目にしたとき、よく調べたものだと私は感心したのだった。

あらためて国立国会図書館のウェブサイトを見た。すると原作者クーパーが明記してあるではないか。以前私が閲覧したとき、書誌情報部分にあることを見逃したのか。あるいは後に図書館が追加記入したのだろうか。

証拠を示すためにつぎに引用する(下線筆者)。

詳細情報

タイトル 海上大冒険談
 著者 J. F. Cooper著
 著者 村上濁浪庵(俊蔵)訳述
 著者標目 Cooper, James Fenimore, 1789-1851
 著者標目 村上, 濁浪, -1924
 出版地(国名コード) JP
 出版地 東京
 出版社 春陽堂
 出版年 1900
 大きさ、容量等 162p ; 23cm

ご注目いただきたい。著者は、ジェイムズ・フェニモア・クーパーだとある。ただし、原作名は書かれていない。

「J. F. Cooper著」というのだが、日訳書のどこにもその記載はない。原作者の生卒年まで明記している。クーパーの著作だと国会図書館

が断定したのには、なにかの根拠があるはずだ。調査能力のある職員が国会図書館にはいる。

よく見ると原作者の記述にすこし奇妙な箇所があることに気づいた。細かいことだが「J. F.」となっている。ここはコンマではなく、「F.」と省略記号のピリオドであるべきだ。なるほど、李艶麗が「J. F.」と書いて同じ箇所を間違える理由は、おおもとの情報がそうになっているせいだった。なにしろ国会図書館が提供する書誌情報なのだ。信用するのが普通の感覚だと思う。

国会図書館が公表する書誌情報に、原作者はクーパーだと明記している。日本の各種目録が右にならうのは不思議ではない。Webcat、WorldCatなどがそれを取り込む、というか連動しているのも当然だ。ネット書店が提供する表記も同じである。李艶麗は疑わずにそのまま原著に取り入れた。それほど国会図書館の記述は信用されている。これが誤りだとは、誰も思わない。

樽目録X(2015)でも作品注釈の冒頭にクーパー著だと記載してもよかった。

翻訳作品のばあい、樽目録では原作底本について判明している事項を注釈前方に置くようにしている。だが、該書についてはそうしていない。理由がある。

樽目録Xの記述

記述に不安を感じたからだ。自分で調べてみた。すると「海上大冒険談」の著者がクーパーだとは確認できなかった。反対に、否定的な確信があった。

アメリカ作家クーパーの作品では、「モヒカン族の最後」が日本で翻訳されている。また、ウェブで検索すれば、「A Tale of the Sea」とか「A Sea Tale」と副題をつけた書物が見える。しかし、それらの副題は、taleであってstoryではない。村上が記述する原作の読みとは一致しない。そもそも書名と副題は区別されるべきものだ。

別のウェブサイトにてクーパー著 “Stories of the Sea” (1863) がある。こちらのほうが日訳に近い。しかし、ストーリーとストーリーズでは異なる。内容をざっと比較対照すれば、日訳とはまったく一致しないのだ。

結局のところ目録Xの注釈では、原作者はクーパーだとはしなかった。彼の著作中に該当する作品をみつけることができない。そうならば、クーパー原作どころか、彼の作品ではない可能性のほうが高い。

私は、国立国会図書館の名前を出して記述を紹介するかたちにした。以下のとおり。

国立国会図書館近代デジタルライブラリーは原作者をJ. F. COOPER著と注記する。ゆえに日本では原作者表示をJAMES FENIMORE COOPERとするのが普通

原作者がクーパーだと記述するのは、間違っている。そこまでは判明した。では、原作はなにか。問題が解決するまで調査を続けるしかない。

探索の試行錯誤

手当たり次第というのは試行錯誤ということとほぼ同じだろう。とにかく思いついたことをもとにして調べる。最近ではウェブ上で検索することが主となっている。紙媒体の時代では利用できる書物も限られていた。英文原書のばあい、調査するにも障害がありすぎた。ようやくこれかなと見当をつけた実物を見るために列車に乗ったり、可能なばあいは図書館経由で借りだしてもらうことも普通だった。それが今や机に座って電腦の鍵盤を打つだけで、ある程度のことはすんでしまう。全部がそうではないにしても、研究環境が大きく変わった。

書名は “The Story of the Sea” で間違いはないだろう。日本語訳者村上がそう書いている。また、書中に登場する人物の名前がわかってい

る。現代風に記して、コロンブス Christopher Columbus、オヘイダ Alonso de Ojeda、ヌーニエス Nun~ez de Balboa、ポンセ Juan Ponce de Leon、ガマ Vasco da Gama、ロックス James Clark Ross、ドレイク Francis Drake などだ。日訳本に原語が記載されているわけではない。自分で調べた結果を示している。これらのものが検索する時の鍵語となる。

Qの出現

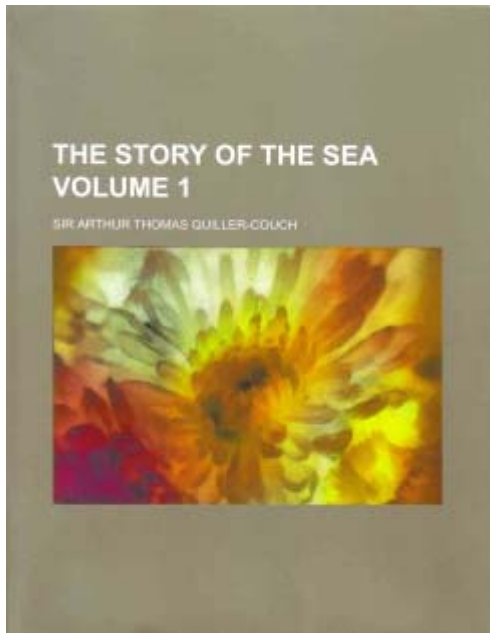
ある書籍が浮上した。Sir Arthur Thomas Quiller-Couch, *The Story of the Sea*. Cassell and Co. 1895、1896という。

クイラー=クーチ (1863-1944) ではないか。シェイクスピア歴史劇を物語に書き換えた作者だ。林紓らがそれを底本に漢訳した。もとが散文だから林訳が散文になるのは不思議でもなんでもない。鄭振鐸はその事実を知らず、林紓らが勝手に脚本を散文化したと非難攻撃した。まったくの濡れ衣である。

ウェブを検索して得られた情報によると、クイラー=クーチの著作は2冊本らしい。2種類の表紙のような絵図が掲げている。画像が小さすぎて詳細が不明だ。そのウェブサイトでは第1巻の英文内容が検索できる。コロンブスは出てくる。だが、その検出数が少ない。一部しか掲載していないとわかる。しかも、その本文を見ることができない。第2巻についてはまったく不明 (2015.11.5当該サイトを再度見た。第2巻も検索だけはできるようになっている。少し発展した。ただし、本文はあいかわらず閲覧不能だ)。

目録によっては、該書を児童用書籍に分類するものもある。それ以上はわからない。

ネット書店から第1巻が購入できることがわかった。手元に届いたものを見て私は落胆した。テキスト本文をただ印字したものにすぎない。読むのが困難である。もとの表紙、扉もないし挿し絵が1枚もない。



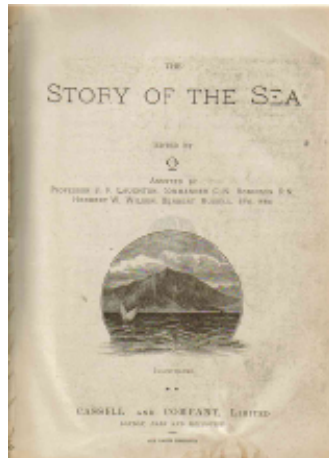
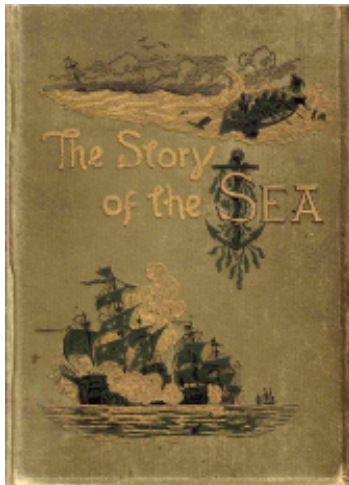
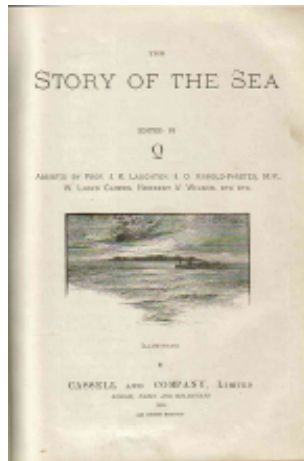
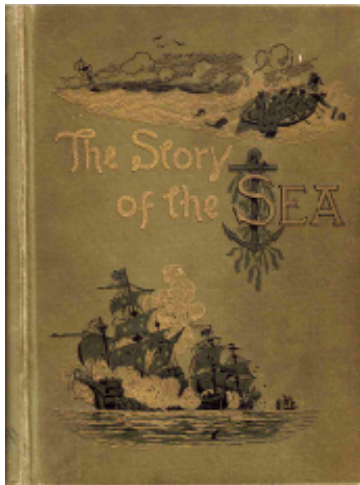
ウェブで読むことのできる英語本文には、2種類ある。

ひとつは、テキストファイルで本文だけを表示する。そういう専門サイトが存在するのだ。原書を自動読みとり機にかけたものらしく本文に誤植が発生しやすい。それをそのまま印刷したものが販売されているばあいもある。

もうひとつは本文を写真版で掲げる。国立国会図書館近代デジタルライブラリーと同じ。その中のいくつかは複写版の書籍になっており、これも書店経由で購入できることがある。

第1巻は、前者のテキスト本文のみの印刷物だった。ないよりはましだが、どのみち村上日記『海上大冒険談』とは関係がなかった。

のちに原物2冊を探して、ネット古書店から購入した。



*The Story of the Sea*について

届いたのを見て私は驚いた。日本でいうA5判、上製本三方金の巨冊なのだ。

緑色の表紙に刻まれた題字と絵図は、2冊ともにまったく同じである。

題字はThe Story of theまでが縄模様の意匠で金色、SEAは活字体で表示されている。下方に数艘の帆船が大砲の煙(これも金色)をあげ、中程より少し上、SEAのSと同じ位置にロープの巻き付いた錨と海草、上方に帆船から脱出した小舟に数人が座ってオールを漕いでいる。遭難者ひとりりをふたりがかりで舟中に引き揚げようとしている。波間に人が漂う。波も金色だ。背表紙では旗を掲げている水兵がいる(写真参照)。

表紙と背表紙を見ただけでは第1巻と第2巻の区別がつかない。それを表わす文字が存在しない。ウェブサイトに掲げられていたのは、ふたつの異なる扉だとわかった。扉にも巻の表示はない。ただし、発行年が1895と1896で別になっているだけ。

おおよその表示は以下のとおり。第1、2巻としたのは便宜的なものだ。

第1巻：Q (ARTHUR THOMAS QUILLER-COUCH) 編 *THE STORY OF THE SEA. VOL.1*, CASSELL AND COMPANY, LIMITED 1895

本文32章、760頁、挿し絵多数を収録する。

第2巻：Q (ARTHUR THOMAS QUILLER-COUCH) 編 *THE STORY OF THE SEA. VOL.2*, CASSELL AND COMPANY, LIMITED 1896

本文37章733頁、第38章15頁は語彙集、索引12頁、挿し絵多数を収録する。

第1、2巻の扉表記は、EDITED BY Qで共通する。Qといえば上に示したとおりARTHUR THOMAS QUILLER-COUCHに決まっている。

異なるのは協力者の一部だ。第1巻は、PROF. J. K. LAUGHTON, H. O. ARNOLD-FORSTER,

M. P., W. LAIRDE CLOWES, HERBERT W. WILSONらだ。第2巻は、PROF. J. K. LAUGHTON, COMMANDER C. N. ROBINSON, R.N., HERBERT W. WILSON, HERBERT RUSSELLら、となっている。

Q原作と村上日記

Q原作の表紙は、ロープが巻き付いた錨とその背後に海草が配置されている。日記表紙の錨はQ原作と同じ。ただし、海草は省略した。ほかの意匠は日記独自のものだ。英文原作が帆船の大砲戦を描いているのに比較すればかなり地味なものだ。

日記についている10枚の挿し絵は、すべてQ原作から選択して同じ図柄である。といっても機械による複写ではない。署名があり「不折」だから中村不折が模写したもの。1枚だけ「S. N」とあるのは、Nが中村で、Sは幼名銚太郎からきているのだろう。

日記とQ原作の挿し絵を掲げる(次頁)。

Q原作のCHAPTER XIX. THE GREAT VOYAGE OF SIR FRANCIS DRAKE.が村上日記の「第八ドレーキの世界週遊」に該当する。Q原作の挿し絵には“THEY DANCED WITH THE SAILORS”と説明文がつく。それを村上日記では「海豹湾の蛮人ドレーキ等の一行と舞踏の図」に訳した。絵柄は同じだが書いたのは別人だから細部が異なるのもしかたがない。

日記のもとになった英文の該当箇所を示す。

第一 コロンブスの垂米利加発見 1-46頁

CHAPTER XIV. GREAT VOYAGES: THE FIRST VOYAGE OF CHRISTOPHER COLUMBUS.

第二 発見後の航海 47-58頁

CHAPTER XV. THE FOLLOERS OF COLUMBUS.

第三 オヘイダの蛮地廻航 59-88頁

同上 途中290頁より



Q原作369頁



村上日訳口絵

第四 ヌー子スの太平洋発見 89-99頁

CHAPTER XVI. FOLLOWERS OF COLUMBUS

(continued)

第五 ボーンセの不死泉探険 100-102頁

同上 途中310頁より

第六 ガマの印度行 103-110頁

CHAPTER XVII. THE ENGLISH ADVENTURERS.

第七 ロツスの南極探険 111-121頁

CHAPTER XXIX. ANTARCTIC EXPLORATIONS.

第八 ドレーキの世界週遊 122-162頁

CHAPTER XVIII. THE ADVENTURES OF JOHN HAWKINS.

CHAPTER XIX. THE GREAT VOYAGE OF SIR FRANCIS DRAKE.

英文原作の第14章から第19章までの抄訳である。村上が「抄訳せし物に有之候」と説明していることと一致する。

国会図書館の書誌情報に掲載してあるクーパーの卒年は、1851年だ。Q原作の第2巻は1896年に刊行されている。クーパーの死後ではないか。刊年を見てもクーパーとは関係がない。

資料をここまで把握したところで、私は国会図書館に質問メールを出した。国会図書館が表示する書誌情報について、原作者はクーパーだとする根拠はなにかとたずねたのだ。

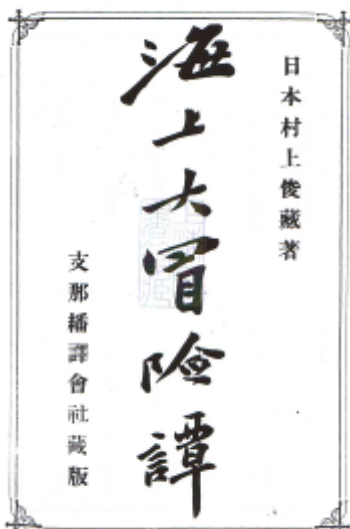
2015年10月30日付で国会図書館よりおおよそ次のような回答があった。この書誌データは、遡及入力した際に原著の著者を調べて補記したと思われるが、補記した内容が間違っていました、というような文面だ。

2015年11月3日に確認したところ、国会図書館は理由を説明せず書誌情報から「著者 J. F. Cooper 著」「著者標目 Cooper, James Fenimore, 1789-1851」を削除した。また、国立国会図書館サーチから検索した画面でも同様に削除がある(ウェブの検索エンジンを利用すると、検索画面にまだクーパーが残っているものもある)。事情を知らない利用者にとっては不意の変更に

思えるだろう。まあ、「海上大冒険談」に注目している人がそれほど多いとは思わないが。突然の削除に見える裏側には、以上のようないきさつがあったのだ。

村上日訳と漢訳

村上日訳本の漢訳は、『海上大冒険譚』だ。初出は『繙訳世界』第1-4期(1902-1903、未見)、単行本は支那繙訳会社訳で同じく支那繙訳会社(光緒癸卯(1903)七月望日)発行である。



日訳の「談」が漢訳では「譚」になっている。『繙訳世界』連載について目録を見れば、期によって「談」と「譚」が混在している。中国では普通のことだ。表紙は「談」なのに、本文、奥付は「譚」だったりする。その反対もある。中国人にとっては同音だからどちらでも同じなのだろう。

日訳と漢訳の章題を掲げる。英文原作は省略した。

- 第一 コロンブスの亜米利加発見 1-46頁
 - 第一編全26章 哥倫布士発見亜米利加 1-22頁
- 第二 発見後の航海 47-58頁
 - なし
- 第三 オヘイダの蛮地廻航 59-88頁
 - 第二編全14章 奥希韃之蛮地回航 23-33頁
- 第四 ヌー子スの太平洋発見 89-99頁
 - 第三編全3章 魯徠士之発見太平洋 35-38頁
- 第五 ポーンセの不死泉探険 100-102頁
 - 第四編全6章 坡命賽之不死泉探険 39-42頁
- 第六 ガマの印度行 103-110頁
 - 第五編全9章 加瑪之赴印度 43-49頁
- 第七 ロツスの南極探険 111-121頁
 - 第六編全6章 羅突之南極探険 51-57頁
- 第八 ドレーキの世界週遊 122-162頁
 - 第七編全11章 杜来克之世界週遊 58-75頁



【注】

- 1) 以下を参照した。横田順彌「第8回 明治の三大冒険雑誌」『日本SFこてん古典()』早川書房 1980.5.15。三上敦史「雑誌『成功』の書誌的分析 職業情報を中心に」『愛知教育大学研究報告・教育科学編』61 2012.3.1 電子版
- 【2016.1.15追記】googleで検索すると削除以前の情報が残っていた。以下のとおり。



《毒美人》等原著鑑定及《東方雜誌》佚名
譯者身份研究

古 二 德

《東方雜誌》月刊由上海商務印書館創刊於光緒30年1月25日(1904年3月11日)，每期章程設有社說、論旨、內務、軍事、外交、教育、財政、實業、交通、商務、宗教、雜俎、叢談及新書介紹，並登載外國小說翻譯。自其創刊至宣統2年12月25日(1911年1月25日)，《東方雜誌》月刊所載譯者不記、原著不詳的小說翻譯不少，如下：

(第一年) 美國偵探小說《毒美人》及白話小說翻譯《郵賊》，兩種小說翻譯原著不詳，譯者不記。

(第二年) 英國小說《雙指印》，原著為 Burford Delannoy 著《The Margate Mystery》，譯者不記；英國小說《天方夜譚》，原著為 Edward Forster 著《The Arabian Nights' Entertainments》，奚若譯。

(第三年) 短篇小說《俠黑奴》，原著為尾崎紅葉所譯的 Maria Edgeworth 著《The Grateful Negro》日譯版，吳禱重譯；立志小說《美人煙草》，原著為広津柳浪，《美人莠》，吳禱譯；愛情小說《空谷佳人》，原著不詳，雖然譯者不記，由《東方雜誌》月刊此時所譯外國小說的風格，可推論出譯者為甘永龍。¹

(第四年) 俄國種族小說《憂患餘生》，原著為二葉亭四迷所譯的 Maxim Gorky 著《Cain and Artyom》(原題：《Кайн и Артём》)，吳禱重譯；美國筆記小說《陶人案》、《數縷髮》、《黑幻像》、《車中語》及《拯三厄》，原著不詳，均甘永龍譯述。

(第五年) 社會小說《鳩毒媒》、札記小說《英雄骨》及美國偵探小說《七醫士案》，均原著不詳，譯者不記；《荒唐言》，原著為 Edmund Spencer 及 Sophia M. Maclehose 所編之《Tales from Spencer: Chosen from the Faerie Queen》，林紓、曾宗鞏同譯。

(第六至七年) 短篇小說《時諧》，J. L. K. GRIMM 著，原著不詳，譯者不記。

(第八年) 白話理想小說《新飛艇》，葛麗斐史著，原著不詳，天遊(陳慶雲)譯述。

本文先鑑定以上一些小說翻譯原著及提供雙語開頭對比。然後，基於小說翻譯譯者文筆的詳細分析，本文試圖提出《東方雜誌》月刊所載外國小說翻譯的譯者身份。

《毒美人》原作

偵探小說《毒美人》，刊於《東方雜誌》第1年第1至7期(1904年3月11日-9月4日)，美國樂林司朗治原著，譯者不記，同年由商務印書館出版，但題名改為《黃金血》(插圖一)。中村忠行認為譯者通過多田省軒所譯的《毒美人》日語版翻譯成漢語。²不過閱讀《毒美人》日語版後，與此譯明顯不一(插圖四、五)。為何兩譯同題名卻無法辯解，有可能《東方雜誌》月刊主編或其他人按照日語定此譯題名。

美國樂林司朗治為 Lawrence L. Lynch，此名為 Emma Murdoch Van Deventer 女士的筆名，美國偵探小說作家，自1870至1912年出版小說有20種左右。《毒美人》原著為《The Last Stroke》，

¹ 古二德，〈《深谷美人》罕見林譯與《空谷佳人》譯者考辨〉，《清末小説から》117期，2015年4月1日，頁21。

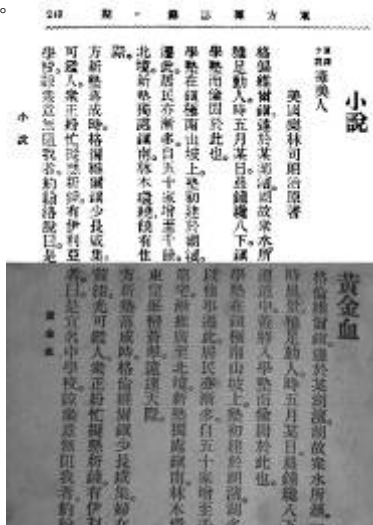
² 中村忠行，〈清末探偵小説史稿—翻譯を中心として(3・完)〉，《清末小説研究》4期，1980年12月1日，頁55。

1896年初版(插圖二、三)。《毒美人》雙語開頭對比如下:

It was a May morning in Glenville. Pretty, picturesque Glenville, low lying by the lake shore, with the waters of the lake surging to meet it, or coyly receding from it, on the one side, and the green clad hills rising gradually and gently on the other, ending in a belt of trees at the very horizon's edge.

There is little movement in the quiet streets of the town at half past eight o'clock in the morning, save for the youngsters who, walking, running, leaping, sauntering or waiting idly, one for another, are, or should be, on their way to the school house which stands upon the very southernmost outskirts of the town, and a little way up the hilly slope, at a reasonably safe remove from the willow fringed lake shore.

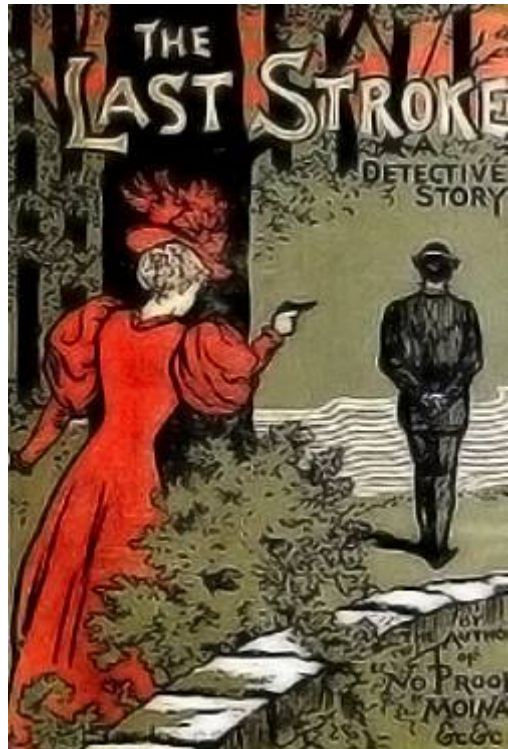
格偏維爾鎮。達於某湖濱。湖故眾水所匯。一面山巒起伏。草木蔥鬱。與地平向盡。四時風景。雅足動人。時五月某日。晨鐘纔八下。鎮中街衢寂靜。惟數童子奔走跳躍。逗遛道中。蓋將入學塾而偷閒於此也。學塾在鎮極南山坡上。塾初建於湖濱。湖多柳樹。



插圖一：《毒美人》與《黃金血》比較。



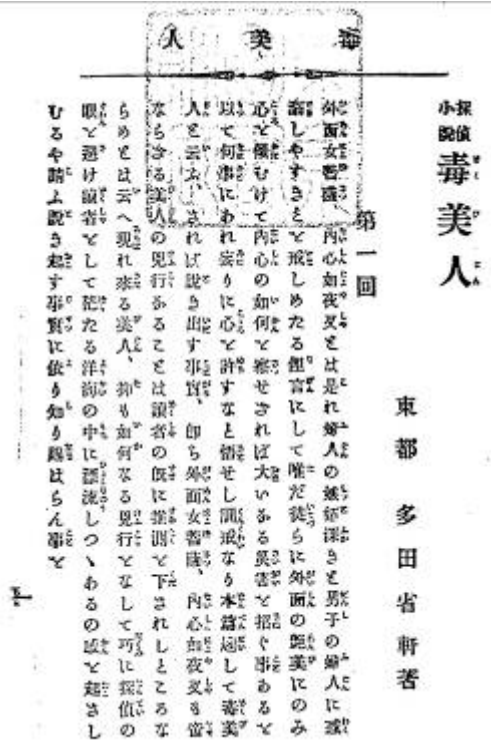
插圖二：《黃金血》，1913年12月出版。



插圖三：《The Last Stroke》，1896年初版。



插图四：《毒美人》日版封面，1896年初版。



插图五：《毒美人》日版，頁1。

《陶人案》等原作

光緒33年甘永龍於《東方雜誌》刊五種小説翻譯，原著者為美國加撒林克羅女史。先前學者認為加撒林克羅為 Anna Katharine Green，但其品不符合甘譯。實則原著者為 Mrs. Catherine Crowe (1803-1876)，英國小説家。甘永龍所譯的故事均為《Light and Darkness; or, Mysteries of Life》(倫敦，1850年初版，3冊)其中之五種，如下：

《陶人案》，刊於《東方雜誌》月刊第4年第5期(1907年7月5日)，原著為《The Tile-Burner & his family》，收入《Light and Darkness; or, Mysteries of Life》(倫敦，1850年)，第1冊，頁267-298。雙語開頭對比如下：

In the early part of the last century, there lived near the town of Pont de l'Ain, in the South of France, a brick and tile-burner, named Joseph Vallet. Joseph was an industrious man, skillful in his profession, and his bricks and tiles were in great request in the neighbourhood. No man does well in life without exciting the envy and the enmity of mean-spirited persons about him, and Joseph was not exempted from the common fate. He had a few evil-wishers, and among these was M. Frillet, who had no other reason for hating Vallet than that he was a rival in trade. Vallet's bricks and tiles commanded a better market than those of Frillet, and that was enough. This hostility of Frillet may have been of little consequence in ordinary circumstances. He possessed, however, the power as well as the inclination to torment his rival; being the king's Attorney-General for the district, a function which rendered him a dangerous enemy to a poor man.

法蘭西南境。龐地菜城。有范爾德者。業陶。頗聞於時。性動敏。業乃大起。凡陶者多嫉之。宰龐地菜者曰忽烈脫。設陶廠。以生計盡為范奪。銜之益次骨。念以官力薙一平民。

易如反掌耳。此念起而范乃不免於禍。

〈數縷髮〉刊於《東方雜誌》月刊第4年第6期（1907年8月3日），原著為《The Story of Lesurques》，收入《Light and Darkness; or, Mysteries of Life》（倫敦，1850年），第2冊，頁205-240。雙語開頭對比如下：

One of the great grievances under which the French nation laboured, previous to the revolution of 1792, was the extreme inequality with which the law was administered. The judges were too frequently corruptible; the influence of the aristocracy was enormous; and if neither of these succeeded in averting an unpleasant verdict, the King's grace was ready to come to the rescue, provided it were solicited by a pretty woman, or that any interest, of whatsoever nature, disposed his Majesty to a favourable view of the criminal's case. The law therefore became, in too many instances, a mere instrument of oppression, from which the people had everything to fear and nothing to hope; whilst the aristocracy used it as a convenient veil for their injustice and exactions.

法蘭西自一千七百九十二年。大革命之後。律法不平。已臻極度。官吏貪墨。威福自擅。貴族之勢。炙手可熱。凡干法者或居勢要。或有為道地。雖重罪得釋。即當事與貴族兩窮於術。而赦令將免之。其關說也。或以利。或以色。故豪橫有力者。多因緣出入人罪。無文罔法。不一而足。氓之蚩蚩。遂惴惴焉若日蹈虎尾矣。

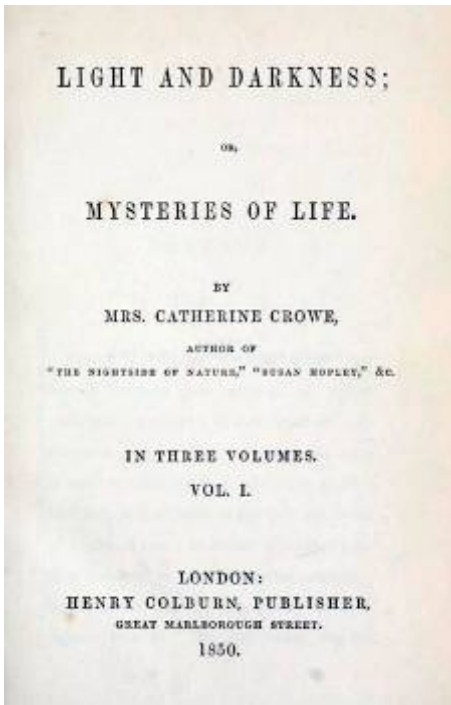
黑幻像）刊於《東方雜誌》月刊第4年第7期（1907年9月2日），原著為《The Priest at St. Quentin》，收入《Light and Darkness; or, Mysteries of Life》（倫敦，1850年），第2冊，頁241-271。雙語開頭對比如下：

It is in the annals of the doings and sufferings of the good and brave spirits of the earth that we should learn our lessons. It is by these that our hearts are mellowed, our minds exalted, and our souls nerved to go and do likewise. But there are occasionally circumstances connected with the history of great crimes that render them the most impressive of homilies; fitting them to be set aloft as beacons to warn away the frail mortal, tossed on the tempest of his passions, from the destruction that awaits him if he pursues his course; and such instruction we hold may be best derived from those cases in which the subsequent feelings of a criminal are disclosed to us; those cases, in short, in which the chastisement proceeds from within instead of from without; that chastisement that no cunning counsel, no indulgent judge, can avert; but which, do what we will, fly where we may. "Monte en croupe et gallope avec nous." It is because we think the history of Antoine Mingrat affords such a lesson, that we propose presenting it to the reader.

夫傳記所載嘉言懿行。足以感化吾心志高尚吾口口至固。當流口熟味之。為吾立身模範。亦有慘刻非常。驚世駭俗之罪狀。及其既發。如大海中之礁標然。於狂波惡浪中。使舟子戒嚴。不致占滅頂之凶者。亦良有以也。³

車中語）刊於《東方雜誌》月刊第4年第8至11期（1907年10月2日-12月29日），1912年12月由商務印書館出版（插圖七），原著為《The Money-Seekers》，收入《Light and Darkness; or, Mysteries of Life》（倫敦，1850年），第2冊，頁33-203。雙語開頭對比如下：

³ 筆者所覽之書籍已損壞，有三字無法識別。



插圖六：《Light and Darkness》初版書名頁。



插圖七：《車中語》1912初版封面。

“Pray, sir,” said a Little man, who, with a great-coat buttoned up to his chin, and a red worsted comforter round his throat, was standing in front of the Glo’ster Coffee House, in Piccadilly, one cold winter’s morning, — “are you waiting for the Telegraph?”

“Yes, I am, sir,” answered the person he addressed, who was a handsome, gentlemanly-looking youth, somewhat above twenty,

某晨。天氣祁寒。有一人。軀短小。外服甚寬博。領承其頷。項圍絨帶。赤色。立劈開得之格羅登咖啡肆前。听然言曰。敢問某君。乃待泰來軌甫車之至者乎。

曰。然。吾渴望其即至。久待於斯。寒不可忍也。答者為一美少年。年可二十餘。其被服舉止。固儼然上等社會人也。

〈拯三厄〉刊於《東方雜誌》月刊第4年第12期（1908年1月23日），原著為《The Bride’s Journey》，收入《Light and Darkness; or, Mysteries

of Life》（倫敦，1850年），第1冊，頁299-314至第2冊，頁2-31。雙語開頭對比如下：

In the year 1809, when the French were in Prussia, M. Louison, an officer in the commissariat department of the imperial army, contracted an attachment for the beautiful Adelaide Hext, the daughter of a respectable but not wealthy merchant. The young Frenchman having contrived to make his attachment known, it was imprudently reciprocated by its object; we say imprudently, for the French were detested by her father, who declared that no daughter of his should ever be allied to one of the invaders and occupants of his beloved country. Thus repulsed, M. Louison had the good sense not to press his suit, and proceeded to Vienna, where he was installed in a lucrative office suitable to his wishes and abilities. Here, however, he could not altogether relinquish the

expectation of being one day married to the fair Adelaide Hext, with whom he continued to correspond.

西歷一千八百九年。法蘭西軍在普魯士時。有法人路易生者。督糧官之一也。悅普商某之女。阿弟蘭特^{海克司脫}。與訂婚約。普商某雖不甚富。而聲望頗高。聞女事。心滋不悅。謂法軍侵普境。於普人為公敵。焉有熱心愛國之人。而與敵人聯姻者。爰峻拒之路即遭擯斥。亦無如何。尋以幹練授任至奧京維也納。遂與女隔。然移不忘盟誓。書緘往還。存問勿絕。」⁴

《時諧》原作

短篇小説《時諧》，刊於《東方雜誌》第6年第6期至7年12期（1909年7月12日-1911年1月25日），格雷門原著，譯者不記，共有56篇，1915年6月28日由商務印書館出版，2冊。原著為 M. M. Grimm 著《German Popular Stories》（Edgar Taylor 編著，倫敦，1823年，1869年再版）。譯者翻譯全書，56篇鑑定如下：

1. 韓斯僥倖 Hans in Luck
2. 伶部 The Travelling Musicians
3. 孤 The Golden Bird
4. 漁家夫婦 The Fisherman and his Wife
5. 鵲與熊戰 The Tom-tit and the Bear
6. 十二舞姬 The Twelve Dancing Princesses
7. 玫瑰花萼 Rosebud
8. 湯拇 Tom Thumb
9. 感恩之獸 The Grateful Beasts
10. 趙靈德及趙靈臺 Jorinda and Joringel
11. 奇伶 The Wonderful Musician
12. 三公主 The Queen Bee
13. 雀復仇 The Dog and the Sparrow
14. 佛雷段律及葛達琳 Frederick and Catherine
15. 有福兒郎 The Three Children of Fortune

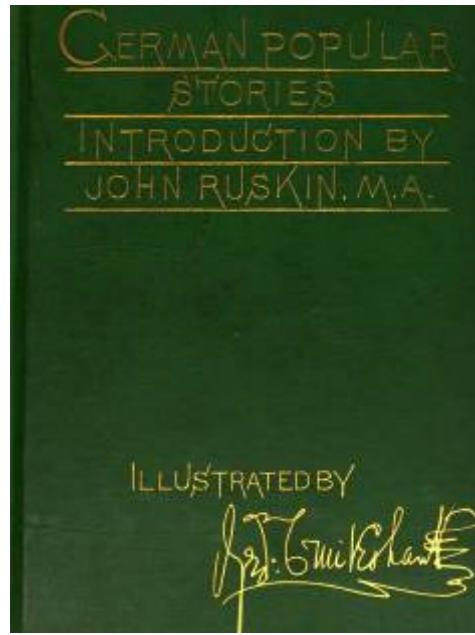
16. 醜髯大王 King Grisly-Beard
17. 牝牡雞 The Adventures of Chanticleer and Partlet
18. 雪霽 Snow-Drop
19. 屨工 The Elves and the Shoemaker
20. 蕪菁 The Turnip
21. 薩潞敦 Old Sultan
22. 獅王 The Lady and the Lion
23. 莽中之猶太人 The Jew in the Bush
24. 金山大王 The King of the Golden Mountain
25. 金鵝 The Golden Goose
26. 孤夫人 Mrs. Fox
27. 韓賽露及葛律德露 Hansel and Grettel
28. 金髮三莖之碩人 The Giant with the Three Golden Hairs
29. 哇 The Frog-Prince
30. 狐及馬 The Fox and the Horse
31. 倫貝史鐵根 Rumpel-stilts-kin
32. 鵝女 The Goose-Girl
33. 忠義約翰 Faithful John
34. 青燈 The Blue Light
35. 阿育伯德路 Ashputtel
36. 少年碩人 The Young Giant
37. 綴工 The Tailor
38. 三鴉 The Crows and the Soldier
39. 丕偉德 Pre-Wit
40. 韓斯及其婦葛樂達魯 Hans and his Wife Grettel
41. 櫻桃 Cherry, or the Frog-Bride
42. 浩路娘娘 Mother Holle
43. 救生之水 The Water of Life
44. 彼得牧人 Peter the Goatherd
45. 聰慧之四子 The Four Clever Brothers
46. 高珊莫 The Elfin Grove
47. 菜 The Salad
48. 鼻 The Nose
49. 五僕 The Five Servants
50. 金髮公主 Cat-Skin
51. 盜婿 The Robber-Bridegroom

⁴ 『』符號由《東方雜誌》編輯編寫，表示段落結束。

- 52. 三懶漢 The Three Sluggards
- 53. 七鴉 The Seven Ravens
- 54. 羅崙及五月鳥 Roland and May-Bird
- 55. 鼠鳥臘腸 The Mouse, the Bird, and the Sausage
- 56. 杜松樹 The Juniper Tree



插圖九：《時諧》卷上1915年初版封面。插圖十：《German Popular Stories》初版書名頁。



插圖十一：《German Popular Stories》1869年版封面。

《東方雜誌》月刊譯者文筆分析

筆者於《清末小説から》117期（2015年4月1日）已經提議《東方雜誌》月刊的年期與譯者有一定相關性，而通過譯者文筆比較法淺析可助於證實其中所不記的譯者。此時辨認譯者為四：甘永龍、吳禱、奚若、及林紓。1911年後天遊（陳慶雲）翻譯兩篇小説，均用白話（請參附錄）。

甘永龍，字作霖，英名為 Kan Tsao-Ling，生於浙江省嘉興市平湖。除英語小説翻譯及新聞報道之外，甘永龍編輯許多漢英雙語教育工具，如《原文莎士樂府本事》（1910年6月初版），《原文撒克遜劫後英雄略》（1910年11月初版），《增廣雙解袖珍英華成語詞典》（1913年6月初版，與朱樹蒸合編），《華英繙譯金針》四版下編（1914年9月四版）等。生平不詳，祇知1917年左右遭受精神病。⁵甘永龍文筆守舊，富有特色，富於使用句末語氣助詞（者、耳、也、矣）及古文疑

⁵ 張元濟，《張元濟日記（上）》，河北教育出版社，石家莊，2000年，頁253、318。

問詞(安、焉)。名字亦為縮寫，如〈陶人案〉中的范爾德縮為范，〈數縷髮〉中的藍斯克、古納、高立魯縮為藍、古、高等，如下：

法蘭西南境。龐地菜城。有范爾德者。業陶。頗聞於時。性勤敏。業乃大起。凡陶者多嫉之。宰龐地菜者曰忽烈脫。設陶廠。以生計盡為范奪。銜之益次骨。念以官力雍一平民。易如反掌耳(〈陶人案〉，頁1)。

所以虐遇范氏者。罔不至。有見而不平者。曰安得實為此案要證(頁3)。

即當事與貴族兩窮於術。而赦令將免之。其關說也。或以利。或以色。故豪橫有力者。多因緣出入人罪。舞文罔法。不一而足。氓之蚩蚩。遂惴惴焉若日蹈虎尾矣(〈數縷髮〉，頁1)。

由此可見，甘永龍文筆雖然近於林譯，但措辭頗為艱澀。詳細閱讀甘譯之後，可見他亦常用許多文言人稱代詞(予、汝)以及賓語代詞(之)，如下：

明怒詰曰。汝何事在彼。曰。吾將往閉雞欄門也。明曰。是謾言。汝必別有所事(〈黑幻像〉，頁21)。

短小者曰。予尚可耐寒。然車未至。終不能去。不如入而向火之為得也(〈車中語〉，頁27)。

吳檣，字丹初，號宣中，又署天涯芳草，生於浙江省杭州市錢塘。因吳檣許多小說翻譯通過日語版，少許研究者認為他在日本留學過，但至今無證。⁶關於吳檣身份研究資料，已由沢本香子詳細整理，不必多述。《東方雜誌》所刊之吳譯有三種：《俠黑奴》，《美人煙草》及《憂患餘生》，均在第三四年發行。雖然其譯通過日語版翻譯成白話漢語版，但同時(光緒34年11月)吳檣亦通過日語版刊法國雷科著《棠花怨》文言翻譯。吳譯文言風格近於林紓，其文又精緻而儉樸，

無多文彩，適度使用句末語氣助詞：

月季夏。法蘭西屬菲魔德岬畔。斜日觀渡。已入海平綫之下。涼月將自東升。是夜穆粒珠伯爵。開夜會於迎賓館。少年四五人。登邱坂而上。行行且語。甲曰。君言花口事。又何益。渠固許嫁於莫禮稼子爵矣。乙曰。何以言之。未許嫁也。惟居巴黎時。兩有所思耳(《棠花怨》，頁1)。⁷

此外，吳譯白話翻譯與其文言風格相同，又強勁又淳樸：

但則從今以後。却便如何。想到兩人善後事宜。一時不得妙法。琴子是決定主意。他原能聚精會神去做。但事情也不是容易做到的。不覺常常歎氣咳聲。義久呢。比琴子的前程。格外要危險利害。他看見琴子那樣憂心悄悄。更不能不加倍煩悶(《美人煙草》，頁14)。

奚若(1880年6月8日-1914年8月25日)，字伯綬，英名為 Richard Pai-Shou Yie，蘇州人。年輕時入蘇州博習學院學習，1899年轉學上海中西書院，1901年回鄉入東吳大學，1907年左右畢業。1902年後任商務印書館編譯所所員、《東吳大學堂雜誌之一》主編及其他職業。當時奚若計劃留學，1910年入美國俄亥俄市歐柏林學院(Oberlin Theological Seminary)，下一年冬季畢業。1914年8月25日因肺病而逝世。⁸奚譯文筆與甘永龍風格同樣守舊，亦富於使用句末語氣助詞(者、耳、也、矣、哉)、文言疑問詞(安、盍、焉)、人稱代詞(余、予、汝)以及賓語代詞(之)。與甘譯相比，奚若所用的詞彙不太濃密，亦不會縮寫人名。此外，奚若喜好「嗚呼」此感嘆詞，與林紓相同。如下：

加利勿聞而惻然。請之曰。汝盍再往。倘有

⁷ 筆者所覽之書籍已損壞，有字無法識別。「花口」為人名，可讀「花嬾」。

⁸ 樽本照雄，〈翻譯家奚若一一附：奚若と謝洪賚の略年譜〉，《清末小説》34號，2011年12月1日，頁1-25。

⁶ 請參沢本香子，〈書家としての吳檣〉，《清末小説》32號，2009年12月1日，頁85-115。

所獲。某當以百西袞司相易。叟喜。楷至底格里河畔。而自言曰。文明哉若人。所言苟不虛。即百得一。願斯足矣。

叟投網於河。有頃收之。甚重出。得一匣。扁且固。加利勿見之。即命維齊蓋發。予叟百西袞司(《天方夜譚》，頁1)。

長歎曰。嗚呼。亦報達之地大人眾。罪人豈易得。況舉動秘密。安知犯者不早遠颺耶(《天方夜譚》，頁2)。

最後，光緒34年《東方雜誌》月刊亦開始發表林紓翻譯。林紓(1852年11月8日-1924年10月9日)，字琴南，號畏廬，又署冷紅生，福建省福州市閩縣人，林紓以譯品著名，身份不必討論。傳統上，林紓小說翻譯文筆被視為「古艷，其描寫也不乏饒有情趣之處，但和當時大多數“仿聊齋”之作一樣，作品的思想和內容都比較古舊」⁹。雖然林紓喜好古艷，其譯內容不僅引進西方思想及新文化，而且還拋棄舊中國小說的章回體。林譯風格頗清晰及易讀，因此其作品在清末民初時享有世間盛名。因1908年林紓已翻譯四十四種小說，而且大多數由《東方雜誌》所刊的商務印書館出版，所以可推未辨認的譯者不包括林紓。

《毒美人》譯者身份

正如以上所述，中村忠行認為《毒美人》譯者通過多田省軒所譯的《毒美人》日語版翻譯成漢語。¹⁰因此可試探性地假設譯者為吳禱。根據《毒美人》小說翻譯風格可見，其譯缺乏縮寫人名，適度使用句末語氣助詞，不富於使用文言疑問詞、人稱代詞(除了「爾」、「吾」、「汝」之外)以及賓語代詞。如此文筆更靠近於奚若及吳

禱。因吳禱經常靠於日語版翻譯漢語小說，若《毒美人》漢譯亦靠於多田省軒日譯，即能推譯者為吳禱。此兩譯同名，兩譯為偵探小說翻譯，而且刊於《東方雜誌》許多吳譯均按照日本《太陽》雜誌而譯。¹¹不過閱讀《毒美人》日語後，與吳譯明顯不一(插圖四、五)。

此外，同年《東方雜誌》所刊的偵探小說《郵賊》白話翻譯，譯者為吳禱(參見下文)。筆者原先認為此譯亦為美國樂林司朗治，所以《毒美人》譯者有可能亦為吳禱。但閱覽樂林司朗治全集後，無一符合《郵賊》。因此，《毒美人》與《郵賊》譯者不必有關。最後，1908年由商務印書館出版美國樂林司朗治著《三人影》(《Shadowed by Three》)，譯者不記。其譯風格近於奚若，明明非為吳禱。《毒美人》譯者為奚若或是吳禱，筆者不敢於判定，但證據似乎證實奚若更有可能性。

《郵賊》譯者身份

偵探小說《郵賊》，刊於《東方雜誌》第1年第8至12期(1904年10月4日-1905年1月30日)，原著不詳，譯者不記，白話短篇小說，由文筆可見譯者為吳禱的淳樸風格：

當今地球上西半球有一箇美利堅國。國中有一地方。名叫西卡哥。離西卡哥二十餘里有箇鄉村。在二十年前的時候。有箇富商。名叫赫斯德。那人是箇財主。既有貲本。又善經營。他生平嘗有一句話。道是以兵立國。總不如以商立國的好。這句說話。當時沒一箇人不佩服他。大凡一國要想圖強。必定先要富。若是不能富。那強字那裡說起呢。我們中國。怯怯犯了這箇病。

雖然原著無法鑑定，但是據最後一句話「我們中國」可推，此譯非直譯，而有意譯的成分。

《雙指印》譯者身份

⁹ 吳明賢主編，《文學文獻研究》，商務印書館，北京，2005年，頁423。

¹⁰ 中村忠行，〈清末探偵小説史稿—翻譯を中心として(3・完)〉，《清末小説研究》4期，1980年12月1日，頁55。

¹¹ 寇振鋒，〈中国の『東方雜誌』と日本の『太陽』〉，《メディアと社会》1期，2009年，頁7-22。

偵探小説《雙指印》，刊於《東方雜誌》第2年第1至5期（1905年2月28日-6月27日），原著為Burford Delannoy 著《The Margate Mystery》，譯者不記。漢譯風格富於使用句末語氣助詞（者、耳、也、矣）、文言疑問詞（焉）、人稱代詞（汝）以及賓語代詞（之），因此可見文筆近於奚若：

英女子路山者。美風姿。尤善祿飾。給事於帝國大行之衣肆。客來肆者艷其服。覺式製之新無與匹。度肆中他衣必稱是。購者麤至。路酬接日旁午。主者獲利則大腆焉（《雙指印》，頁1）。

頰頰戰而言曰。汝何以為此。惠以未逢怒也。復持之（《雙指印》，頁2）。

《鳩毒媒》譯者身份

社會小説《鳩毒媒》，刊於《東方雜誌》第5年第1至3期（1908年2月26日-4月25日），原著不詳，譯者不記。譯者風格近於奚若文筆：

如期復至。維康起坐迎之。脣翕張。不能為辭。馬可曰。稅金便也未。維康曰。已告君。後當措還也。必不可。僕亦計無所出。有聽君處分而已。馬可曰。君無計耶。吾以為有之。特不為耳（《鳩毒媒》，頁2）。

《英雄骨》譯者身份

札記小説《英雄骨》，刊於《東方雜誌》第5年第4至6期（1908年5月24日-7月23日），原著不詳，譯者不記。此刊第4期包含〈阿戈羅〉、〈開色必考〉及〈老冰升〉；第5期包含〈幼烈思〉；第6期包含〈經周〉、〈愛的聲〉、〈叟而梅〉、〈悅甫〉及〈一康波〉。雖然原著不詳，但是有三種短篇小說的內容易推。〈阿戈羅〉為古希臘神話〈The Argonauts〉，漢譯近於 Arthur Rackham Niebuhr 著《The Greek Heroes》，但原始資料與此書不同。譯者所譯一些數名如下：

漢譯	英名
阿戈羅	Argonauts
劈力施	Pelias

易聲	Aeson
掌深	Jason
考爾喫 / 考爾吃	Colchis
金羊毛	Golden Fleece
海爾姆神	Queen of the Sea?
來福爾	Nephele
壓磨	Athamas
福理客	Phrixus
活爾	Helle
益阿	Ino
阿戈	Argo
愛生	Athena
靈木	Dodona wood
北風	Boreas
泊爾克	Pollydeuces / Pollux
亞密球	Amycus
飛理司	Phineas
濟司	Zeus
海皮四	Harpies

〈老冰升〉為《The Swiss Family Robinson》簡篇，譯者所譯一些數名如下：

漢譯	英名
老冰升	Robinson
福悅司	Fritz
拿德	Ernest
察克	Jack
沙克	Shark's Island

〈幼烈思〉為古希臘神話〈Ulysses〉，譯者所譯一些數名如下：

漢譯	英名
幼烈思	Ulysses
乍野	Troy?
意色開	Ithaca
開普沙	Calypso
賽康口岸	Cicones
墨尼阿	Malea

剩餘短篇故事無法鑑定，但因非與古希臘文化有關，筆者認為《英雄骨》為刊於英美時報的縮寫短篇小說集。

終於，關於譯者文筆可說，近於以上所述的奚若風格：

見幼烈思等入彼山窟。乃潛塞其門擒之。曰。汝來何為。為商乎。抑將為盜。眾聞其聲如霆震。皆辟易。幼烈思獨從答曰。皆非也。吾曾為乍野王。被希臘人侵迫而來（〈幼烈思〉，頁8）。¹²

《七醫士案》譯者身份

美國偵探小說《七醫士案》，刊於《東方雜誌》第5年第10至12期（1908年11月18日-1909年1月16日），原著不詳，譯者不記，原始資料為紐約偵探報。按照此譯文筆無多文彩，適度使用句末語氣助詞，筆者估計近於吳禱文言風格：

維時值十一月中。夜寒刺骨。雨雪隱氾。路中絕少行人。惟無業貧民。躑躅往來。在紐約之舜烈來園附近。荒寒愈甚。平素本鮮人跡。是夜益寥落。小勃著短後衣。寒儉瑟縮。作貧民飾徘徊道旁。（《七醫士案》，頁6）。

《時諧》譯者身份

短篇小說《時諧》，以上為鑑定。譯者文筆近於以上所述的奚若風格：

韓斯事其主者七年。一日謂主人曰。予限滿矣。茲欲歸而觀母。請給我備資。主人曰。子之為我僕也。忠慤而勤能。享報宜豐。乃餽以銀一錠。大如其首。韓斯取裹帕裹之。負諸肩。蹀躞上道。久之。疲茶甚。望望而見一人。騎駿馬至。態頗豪。韓斯羨而呼曰。美哉騎乎。（〈韓斯僥倖〉，頁1）。

附錄：刊於《東方雜誌》的兩種天遊小說翻譯

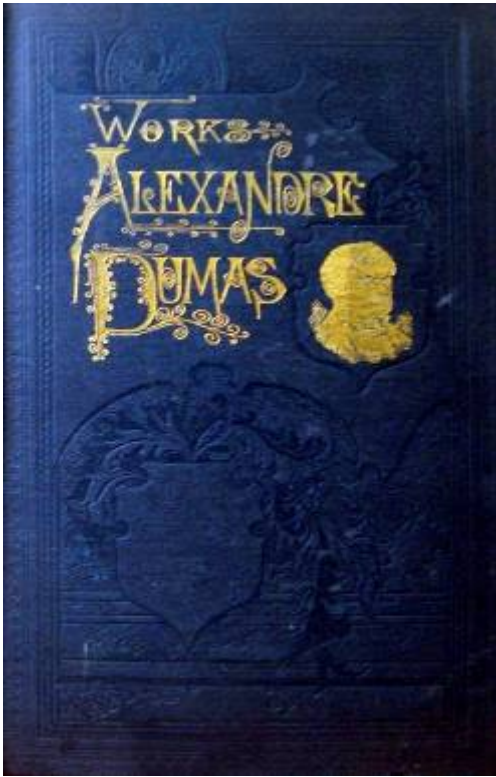
天遊（陳慶雲）於《東方雜誌》刊兩種翻譯：

白話理想小說《新飛艇》，葛麗裴史著，刊於《東方雜誌》第8年第1至12期（1911年3月25日-1912年6月1日），原著不詳，筆者亦無法鑑定。但此譯有兩種未解決的問題。第一問題為1907年由商務印書館出版的科學小說《新飛艇》，原著不詳，譯者不記——兩譯是否同一本書？第二問題為1913年6月由商務印書館出版的《飛將軍》，葛麗裴史著，天遊譯述，原著不詳，書名與《新飛艇》相去不遠——兩種翻譯是否亦同一本書？由如下圖片可見，1907年版的《新飛艇》與天遊譯述不同，而1913年的《飛將軍》與《新飛艇》同一（插圖十三至十五）。有可能因1907年商務印書館已出版一篇有《新飛艇》題名小說而改。



插圖十二：《新飛艇》1907年版封面。

¹² 幼烈思（今譯為尤利西斯）為意色開（今譯為伊薩卡島）王，希臘人。因原始資料不詳，無法判定錯誤原於原著者還是譯者。



挿圖十七:《Works of Alexandre Dumas》1893年英版封面。

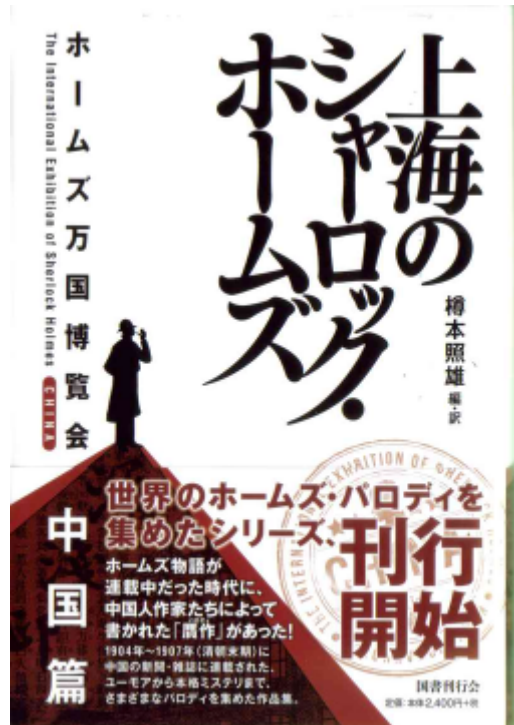
歴史小説《絳帶記》，刊於《東方雜誌》第11年1期至第12年11期（1914年7月1日-1915年11月10日），Alexandre Dumas père 著，天遊譯述。原著為《The Conspirators》（收入《The Works of Alexandre Dumas》，1893年英版，原題名《Le chevalier d'Harmental》，1843年初版）。此譯為白話意譯，因此難定原始資料，但天遊所譯為英版。中英雙語開頭對比如下：

On the 22d of March, in the year of our Lord 1718, a young cavalier of high bearing, from twenty-six to twenty-eight years of age, mounted on a pure-bred Spanish charger, was waiting, toward eight o'clock in the morning, at that end of the Pont Neuf nearest the Quai de l'Ecole. So upright and firm he was in his saddle that one might have believed him to be placed there as a sentinel by the Lieutenant-General of Police, Messire Voyer d'Argenson. After waiting about half an hour, glancing

uneasily at the clock of the Samaritaine, his eye, wandering till then, appeared to rest with satisfaction on an individual who, coming from the Place Dauphine, turned to the right and advanced towards him.

一千七百十八年三月二十二號蚤起。牛敷橋邊有一少年騎士。攬轡躊躇。像是等什麼人。那坐下馬昂頭奮鬣。馬上的人。年紀二十左右。生得雄姿英發。一表非凡，當時警部大臣。名叫倭善森。極是精明強幹。紀律森嚴。行道的人。都當這少年是倭善森部下斥候隊中人物。過了半點鐘光景。那一人一騎。兀自立著不動。橋那邊巍然植立的。是賽瑪里丹鐘塔。那鐘上的長短針。

四



樽本照雄編訳『上海のシャーロック・ホームズ ホームズ万国博覧会 中国篇』 国書刊行会2016.1.20

清末小説研究会 <http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto>

漢訳『奇獄』の謎 3

結論検証篇(上)

沢本香子

『奇獄一』と『奇獄二』の実物を見ることなく、関連資料だけによって結論を提出したのが前稿だった。

くりかえして以下のとおり。

1 『奇獄一』は、GEORGE McWATTERS, *DETECTIVES OF EUROPE AND AMERICA, OR LIFE IN THE SECRET SERVICE*. 1877から千原日訳経由で漢訳された。

2 『奇獄二』は、収録4作品のうち2作品がARTHUR CONAN DOYLE 作で(のちMYSTERIES AND ADVENTURES. 1889収録)英語原文によって漢訳された。

『奇獄一』と『奇獄二』の複写(上海図書館所蔵)を入手した。前稿と重複する部分があるが、まとめて表示しておく(写真は次頁)。

奇獄一(偵探小説)

美国麦枯滑特爾著 丹徒林蓋天訳述

奥付:

甲辰(1904)十一月初版 小説林偵探小説之一

発行兼編訳者:小説林社、

印刷所:日本・翔鸞社

総発行所:上海・小説林社

収録作品:

第1章 假死偽葬、第2章 郵書之奇禍、第3章 金鋼[剛は目次]石之頸鏈、第4章 籤票、第5章 金網、第6章 万金之皮袋

奇獄二

原作者不記 呉門華子才訳

奥付:

丁未(1907)年四月初版

編輯者:呉門華子才

印刷者:上海・小説林社活版部

発行者:上海・小説林社総発行所

収録作品:

亜門特被殺案、假死竊産案、銀柄斧案、虚無党之秘密会

表紙絵は、両書ともにバラの花と茎に葉をあしらう。画家が異なり同じ絵柄ではないが、バラで共通する。「奇獄」の題字もそれぞれ別人の手になる。

違いといえば、「一」の本文には原作者を美国麦枯滑特爾原著、丹徒林蓋天訳述と示し、角書を偵探小説とするところだ。その他の箇所は、前に示した(写真でも見た)とおり。

「二」には、どこにも原作者の名前はない。原書についての解説説明もない。本文に呉門華子才訳、奥付は編輯者が同じく呉門華子才となっている。小説林社総発行所、丁未年四月初版。「一」には偵探小説という角書があった。

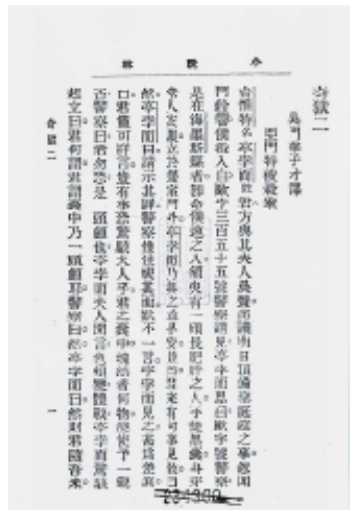
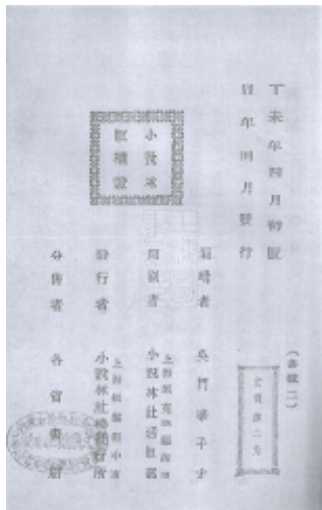
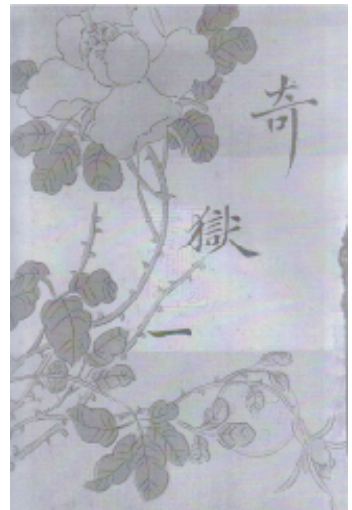
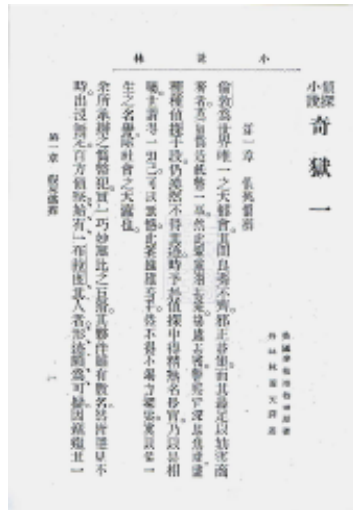
「二」には角書そのものがない。

訳者の華子才は、アメリカのニック・カーターものを多く漢訳して小説林社より刊行している。その人について詳細は不明*8。

組版は、29字×11行で2書ともに同一。

「一」の本文は54頁、「二」は76頁(カット絵のみの空白)となっている。

実物を手にした阿英、そのほかの研究者は、一見して両書を同一の原作者のものだと考えた。無理はないと思う人がいるかも知れない。私は、そうは思わないが。



『奇獄一』については、つけ加えることはあまりない。

阿英目録が書いていた刊年の光緒三十一年(1905)が誤っている。甲辰(1904)十一月初版である。

もうひとつあげるとすれば、収録した作品題名だ。

「金剛石之頸鏈」は目次だけの表示である。本文では「金鋼石之頸鏈」になっている。確かにダイヤモンドは「金剛石」であって「金鋼石」は誤植なのだろう。目次と本文の表示が異なるばあい、本文の「金鋼石」を優先したい。それが私の基本方針だ。ここは注をつけて注意

する。

問題は、『奇獄二』のほうだ。

こちらも阿英目録が書いていた刊年の光緒三十二年(1906)が誤っている。丁未(1907)年四月初版である。また、「西門特」ではなく「西門特」。さらに、小説林社広告の「秘密案」が間違い。こちらは、阿英目録にある「秘密会」とするのが正しい。なぜ広告が誤ったのかはわからない。

「虚無党之秘密会」から見てみよう。

「虚無党之秘密会」のばあい

「虚無党之秘密会」の原文は、前述のとおり



“London Society”1881.4, Vol.39

Conan Doyle “A Night Among the Nihilists” (“London Society” 1881.4, Vol.39. のち *Mysteries and Adventures*. 1889) だ。ただし、漢訳底本については、雑誌初出のものかのちの単行本かは特定できていない(後述)。

本文を比較するために、原抱一庵の日訳(ルビ省略)と華子才の漢訳を掲げる。抱一庵日訳は、華子才漢訳とは関係がない。ただし同時代の翻訳だから参考になると考える。なおドイツ原作の日訳には笹野史隆訳(1999)*9を使用させてもらう。

【ドイツ】“Robinson, the boss wants you!”

“The dickens he does!” thought I; for Mr. Dickson, Odessa agent of Bailey & Co., corn merchants, was a bit of a Tartar, as I had learned to my cost. “What’s the row now?” I demanded of my fellow-clerk; “has he got

scent of our Nicolaieff escapade, or what is it?”

“No idea,” said Gregory; “the old boy seems in a good enough humor; some business matter, probably. But don’t keep him waiting.” So summoning up an air of injured innocence, to be ready for all contingencies, I marched into the lion’s den. p.167

「ロビンソン、ボスが呼んでるよ！」同僚のグレゴリーが言った。

「ちえっ！」わたしは心の中で言った。というのは、これは自分の苦い経験で知ったのだが、オデッサで小麦商社のベイリー商会の代理店を営んでいるディクソン氏は相当の気むずかし屋なのだ。

「一体なんだろう？」わたしはグレゴリーに訊いた。「ニコライエフがはめをはずしたけど、それに気づいたんだろうか？」

「分らんねえ」グレゴリーは言った。でも、機嫌は悪くないようだ。何か仕事のことでだろう、きっと。待たせちゃ、まずいよ」

何が起きようと平気なように心構えをし、悪いことはしてないのに何を言ってるんだといった態度でライオンの巣に行進していった。126頁

日訳第1行にある「同僚のグレゴリーが言った」は、ドイツ原作には見えない。そういう版本があるのかどうかはわからない。すくなくとも、雑誌初出とのちの単行本にはない。訳者による説明だろうか。

辞書によると dickens は、devil の意味だという。「くそ！」と書けば下品であると感じるのなら、上記日訳のようになる。

corn merchant は雑穀商だ。小麦商社を含むから問題はない。

Nicolaieff ニコライエフが突然出てくる。説明がないのでロビンソンの同僚か、と想像するほかない。

抱一庵の日訳を見る。

【抱一庵】「魯敏遜！ヂクソン氏が御身に用事ありとなり」これ帳簿掛のグレゴリーの声なり

余は読みさしの『オデッサ』新聞を下に置き、徐に体を起して支配人室に行けり
ヂクソン氏は齡こそ未だ二十七なれ[ど]商売に掛けては頗る機敏の才あり、ベイリ商会オデッサ支配人として英国本店より三年以来派遣せられ居るなり 27頁

抱一庵は、主人公ロビンソンが『オデッサ』新聞を読んでいたことにした。原文にはない。オデッサにある会社だから従業員が地方紙を読んでいても不思議ではなからう、という想像だと思ふ。しかも社長のディクソンの年齢と赴任年数まで補足して説明する。いずれも抱一庵の加筆である。だが、別の箇所ではディクソンがすでに歳をとっている(Dickson was growing old now)と説明している(抱一庵はその部分を省略した)。それと一致しない。

これらを見ても、英文に忠実な翻訳とは言うことができない。大筋をはずさずに加筆して隙間を埋めた、ということは可能だろうが。

華子才は、その部分をどう漢訳しているか。

【華子才】密斯忒速克孫為培蘭米穀公司之総經理人。一日。語其會計員辯利迦但曰。請君代吾往喚落貧生入。按落為一青年人。体偉貌麗。任事勤謹。素為速克孫信任。聞辯利迦但出招。急入見。63頁

ミスタ・ディクソンはベイラン米穀会社の社長である。ある日、その会計員グレゴタンにむかって言った。「ロビンソンに来るように言ってくれないか」ロビンソンは若者で、体つきは立派、容貌が美しく、仕事は勤勉でありディクソンの信頼が厚かった。グレゴタンが呼ぶので急いで入っていった。

書き出しから書き換えている。ロビンソンで

はなく社長のディクソンを出した。Bailey ベイリ - の漢訳「培蘭」からは、日本語になおせば「ベイラン」くらいにしかならない。「貝礼」「宝利」など、それらしい漢字があったはずだ。英文の corn merchant は前述のように雑穀商だが、華子才は米穀会社にした。微妙にズれる。部下のグレゴリーGregory が、漢訳では辯利迦但グレゴタンになっている。「但」は誤植ではないか。原文にはないロビンソンの外見について加筆する。

華子才の漢訳も抱一庵の日記に負けず劣らず改変していることになる。

穀物買付のため地方への出張を命じられたロビンソンは、同僚のグレゴリーより旅行カバンを借りて汽車で出発した。

華子才は、なぜかしらディクソン社長からカバンを借りたことに変更している(63頁)。わざわざそうした意味が不明だ。

ロビンソンが駅に降りると迎えに来ているはずの取引相手の富豪本人がいない。彼のカバンに目をとめた人物から馬車に乗るように案内された。富豪の邸宅のはずなのに汚い場所に到着した。

物語の大筋とはあまり関係ないが、どのように翻訳したのかを見るために引用する。

【ドイル】We were there, to all appearance; for the droschky stopped, and my driver's shaggy head appeared through the aperture.

"It is here, most honored master," he said, as he helped me to alight. p.172

どう見ても、着いたようだった。馬車が止まり、あの御者がもじゃもじゃ頭を隙間から突っ込んだからだ。

「光栄あるお方、着きました」男はわたしが馬車から降りるのを手助けしながら言った。129頁

【抱一庵】馬車の止まると均しく吾不思議の案内者は後の台より閃然と降り、扉を排

き、余を扶け下し、次で一步退き、恭やしく余に一揖し「閣下。即ちコゝにて候ふなり」33頁

【華子才】御者下座報曰。It is here, most honored ^{ママ}moster. 在此便是。扶落貧生下車。66頁

御者は座席をおりて「ここです」と言い、ロピンスンを助けおろした。

華子才がわざわざ英語原文を誤植してまで引用するのはなぜなのか。物語の展開に特別な意味をもたせた箇所ではない。英文から直接漢訳しているといいたいのか。不可解だ。

穀物商の一社員であるロピンスンは、前もって説明してしまえば、ニヒリスト(無政府主義者、虚無党员)の屋敷に案内されたのだった。彼が同僚から借りた旅行カバンが目印となって人違いされた模様。読めば自然にわかるように書いてある。

待つようにといわれた部屋が怪しい。まるで独房のようだ。「dismissal room 解雇部屋」だと呼ばれていることをあとで知る。「dismissal 解雇」が鍵語である。その室内描写のえぐい箇所を一部分引用しよう。

【ドイル】Both floor and walls were thickly splashed with coffee or some other dark liquid. p.173

床も壁もコーヒーかそのたぐいの黒い液体で濃いしみができている。129頁

【抱一庵】見廻らせば床とも云はず壁とも云はず、咖啡の汁の灑ぎかけられ、間々質の知れぬ液汁も交じり、34頁

【華子才】牆壁と地板各處。皆傾澆飲残咖啡。凝塵霉黒。66頁

壁と床のいたるところに飲み残しのコーヒーで黒く変色して固まっている。

「黒い液体」というのが怪しくも恐ろしい。

華子才はコーヒーだけしか漢訳しておらず、恐怖の迫力がいまひとつ不足する。ドイルの原作は、細かな描写が続いているだけで説明はしない。だからこそ、あとで人を「解雇」するという表現が出てくると今まで読んできた室内描写を含むばらの記述が一瞬に結びつくというわけ。

独房から大きな部屋に案内された。大会議場へ行く前の段階である。

テーブルに出されたのは「シェフのスープ *chef's soup*」だ。抱一庵はただの「スープ」にし、華子才は「ぶどう酒 葡萄酒」に変更する。普通名詞を別物に置き換える。雑誌初出と後の単行本で単語が違うのかと思った。初出の『ロンドン・ソサイエティ』をウェブサイト(後に影印本)で見たが、そのような書き換えはなかった。華子才の気まぐれらしい。

話し相手になったのは、ペトロキンという名前の人物だ。ロピンスンに豊富な意見と該博な知識を披露した。すなわち次のようになる。

【ドイル】His remarks, too, on Malthus and the laws of population were wonderfully good, though savoring somewhat of Radicalism. p.174

彼はマルサスとその人口論についても話したが、内容は見事なものであった。ただし、過激主義的なところが少しあったが。130頁

ドイルのこの部分は、ロピンスンが直面している場面をよく表現している。主となるのは、ふたりの認識の行き違いだとわかるだろう。ロピンスンは、自分が会話をしているのが商売の相手だと考えている。だから、マルサスの人口論に関するペトロキンの意見はすばらしいと思う。ただし、ペトロキンは無政府主義者の立場で人口論を批判しているのだ。それを私の言葉でいえば「なんとなく過激派の趣がする」とあくまでもロピンスンの立場で表現した。読者は

そのちぐはぐさ、行き違いを感じて楽しむ。

【抱一庵】マルサスを論駁し、人口論を非難し、別に独自一己の意見を吐き来る所鋒鋭当るべからず、尤も論は概して急激のものなりき 36頁

抱一庵は、ドイルの原文をうまく日本語に移し替えた。「論駁し」「非難し」と補足することで読者にはより理解しやすくなった。そう私は判断する

では、華子才はどうしたか。

【華子才】潘勞根極称道英国政治之完備。民人自由之幸福。67頁

ペトロキンはイギリス政治が完備していること、人々が自由で幸福であることをとても称讃した。

奇妙なことにしてしまった。無政府主義者にイギリス政治を称讃させてどうするつもりか。政府の存在を否定するのが無政府主義だ。虚無党は、それをさらに過激にし全制度の破壊を主義とする。せっかく「虚無党之秘密会」と漢訳したのにもかかわらず、その虚無党についての知識はなかったらしい。中国ではそれ以前から虚無党小説は流行していた。それから見れば、華子才の漢訳は不備なものであるといわざるをえない。彼は、英語を理解する。だが、ドイルの英文を味わうのは無理だったのかと不安を覚える。

ロビンソンとペトロキンは立場が異なり認識が違う。ロビンソンは商社員だし、ペトロキンはニヒリスト、暴力革命主義者だ。自分たちの仕事について表現する単語が自然と別物になる。ロビンソンは自分がやっているのは当然ながら「商売 trade」だという。ペトロキンはそこをつかまえる。抜粋する。

【ドイル】“ but I am surprised to hear you call our glorious association a trade. (中略) A spiritual brotherhood would be a more fitting term.” p.174

それにしても、名誉ある結社を商売とお呼びになるとは！（中略）精神的兄弟関係というのが、もっとふさわしい言葉ではないでしょうか。130頁

問題は association とそれに対応する trade だ。それぞれ結社と商売という単語が当てられている。日本語訳はそれでいい。だが、もう少し工夫ができないものか。ドイルは association という単語を慎重に選択した上で提出していると考えられるからだ。

この場面は、あくまでもロビンソンとペトロキンの認識の差異を目立たせるところに眼目がある。すなわち、ロビンソンは穀物の買付を商売としている。ペトロキンは暴力革命を実行している。ふたりの仕事内容はもともと異なる。食い違っているにもかかわらず、双方ともに同じ仕事に従事していると勘違いするその落差を読者は知る。ドイルは、ぎりぎりまで勘違いの状態を維持しようとしている。ペトロキンは、あからさまに主義主張、無政府主義、虚無党、革命などと発言すれば、その瞬間にドイルの物語は終了するからだ。

ロビンソンとふたりで勘違いしている状態を継続させるためにドイルが選択したのが association だ。これを訳して結社を当てるのは、辞書的にはそれでいい。だが、商売という言葉と不均衡になってしまう。そう感じる。結社という組織を、商売という活動に対比させたことになるからだ。ドイルは玉虫色の意味を込めて association を使用している。この箇所への翻訳には工夫があってもいい。商売に対応する、同じように活動を表わす訳語はないものか。

抱一庵は次のように翻訳した。

【抱一庵】「然しながら吾々の光栄ある大
事業を商売と呼び做す御身の言に余は驚か
ざるを得ず、(中略) ^{スピリチュアル、フラグーフード}精神的兄弟。こ
れ当に吾々に冠らすべき標称にあらず
や！」36-37頁

抱一庵は association を大事業と訳した。trade
が商売だからそれに対応する association は共同
事業とすれば落ち着きがよい。確かに辞書的に
は結社、団体ではある。共同事業を行なう組織
であるからそうなるのも納得する。ただし、翻
訳してそのまま結社とすると商売とは平衡がと
れないという意味だ。そうくりかえす。

共同事業を行なう結社として、別に称して
「精神的兄弟」としたのが抱一庵だ。英語原文
の読みをルビに使用して適切な訳になっている。
華子才は次のように漢訳した。

【華子才】但吾所奇者。何以君名吾儕之会
為業耶。君以此名加於如此最荣誉之会上。
鄙人頗覺其失宜。何若名之曰弟兄会。則始
不昧此会之宗旨。68頁

私が驚くのは、君がなぜわれらの結社を
商売と称するのかだ。君はその呼称をこの
ような最も荣誉ある結社に冠するのは、適
切ではないと強く思う。もしも兄弟結社と
いうのであれば、本結社の主旨をそれでこ
そ表わしている。

華子才は、結社の意味で「会」を使用する。
また spiritual brotherhood を精神抜きの「弟兄
会」としてしまった。彼にこまかな対応を期待
するほうが無理か。

夜の8時になり会議室に案内された。その場
の責任者は Alexis アレクシスという。抱一庵は
「総裁」と訳し名前は出さない。華子才は「亜
来克雪斯」と音訳してこれは原文に忠実だ。

大会議場である。ロビンソンは、穀物契約に
ついての会議だとばかり考えている。「イギリ

ス代表のガスターヴ・バーガーGustave Berger,
the English agent」175頁だと皆に紹介された。
ロビンソンはそれを訂正して自分はトム・ロビ
ンソン Mr. Tom Robinson だという。ロビンソン
と称するのはイギリスでの偽名であると参会者
は考えて不思議にも思わない。誤解は継続して
いる。

鍵語である「解雇 dismissal / dismiss」が頻出
する。ドイル原作と日訳、漢訳を対照表にまと
めた。×は訳語がないことを示す。

【ドイル】 173頁 176頁 176頁 176頁 177頁 177頁

【抱一庵】 × 処分 免黜 免黜 免黜 許す

【華子才】 × 斥退 斥退* × 斥退 治

「解雇」は一般の会社で普通に使用する用語
だ。ドイルがわざとそれを使用するのは、ロビ
ンソンが会社員であり虚無党の秘密会議に紛れ
込んだ事実を読者に気づかせない意図による。
ニヒリストたちが人を処刑するとき、実際に
「解雇」といったかどうかは問題ではない。
あくまでも勘違いをどこまで持続できるかが作
品の主要な部分だ。

抱一庵は結社のばあいと同じように、用語を
完全に統一してはいない。免黜(めんちゅつ)
とは免職にすること。黜だけでも、やめさせる、
追放する、とりのぞくという意味だ。解雇と共
通する。英語発音の「ジスミツシヨン」(別の箇
所ではジスミツサル)をルビにしてふる。その
前後の文脈に応じて柔軟に対処している。

華子才は、訳語の統一を行なったとわかる。
ただし、*印の箇所でもとんでもない捻破りを実
行した。ネタばらした。

【華子才】求請君等勿斥退吾名(割注:虚
無党致死人命之口訣)70頁

みんな、おれを解雇するのはやめてくれ
(割注:虚無党が人を殺すときの隠語)

ドイルの原作は、謎解きの要素が強い。相手の様子がおかしい。本当のところは誰だろう。まわりにいる人々は何者か。解雇するという普通の単語を使いながら、どこか意味するところが違うように感じる。なんだろうな、と読者が思うように作者は誘導しているのだ。怪しい人々が使用する解雇の意味が判明するのは、もう少しあとになる。その箇所を示そう。

ロビンソンは、周囲の様子が奇妙だと感じ始めている。男が連れ出されてきた。「解雇」しないでくれと男は泣きわめくが、解雇が宣告された。男が連れ去られていき、ドサツという音(a dull thud)が聞こえた。

決定的な台詞が出てくる。

【ドイル】Death alone can dismiss us from our order, p.177

死だけが我が結社からわれわれを解雇できる。132頁

【抱一庵】死ひとり誓約違犯を吾人に許す。40-41頁

【華子才】以此方法治叛会者。足可使人不致冒入吾会。70頁

この方法によって結社の裏切り者を処罰するからわれらの結社に入りにくくさせることができるのだ。

結社を抜けるには死ななくてはならない。彼らが使う解雇とは、殺すという意味であることが表明された。

ドイルの英文に文句をつけるのはどうかと思うがひとこと。上に見える our order だ。笹野は、「我が結社」と正しく理解している。だが、ドイルが使用していたのは association だった。この原文は our association であるべきだと思う。同じものを別の単語で言いかえるのはドイルの文章では普通に見られるらしい。だが、この箇所に限っては別物を使うのは不適切だ、と再び思う。

ここにいたってロビンソンは、ようやくまわ

りにいる人々がニヒリストであることを知ったのだった。自分とは人違いでこの場に連れてこられた。

抱一庵の「誓約違犯」は、from our order からかと推測する。ここの order を誓約と解したらしい。「許す」も原文の dismiss にもとづいてはいるが、ずれている。

華子才は「治」を使い処罰するの意味だ。前に割注で解雇のネタばらしをしたから別の単語をあてたのだろう。後半は華子才による加筆だ。不要だと考える。

華子才の施した割注は、なにを意味するか。謎解き物語に関する彼の理解は、浅い。読者が自然に理解するのを待たずに解答を先に与えたからである。読者の楽しみを奪う訳者がいるだろうか。華子才よりも先に日訳した抱一庵(新聞連載は1902年、単行本は1903年)の方が、ドイル原作をより深く理解しているといわざるをえない。

ただし、抱一庵の日訳がドイルの原作にまったく忠実かといえば、そうでもない。

イギリス虚無党員バーガーに成りすまざるをえないロビンソンは、質問責めにあう。イギリスの状況はどうか。いいですよ。無理矢理ひねりだす回答だ。

イギリスの委員長がソルテフ支部に親書を書いたか。文書はない。口頭で。

抱一庵は、なぜだかこの部分を削除した。そのかわりに12人の密使が12カ国に派遣されたか、などという問答に差し替えた。どうしてそうしたか、理由は不明。自由に変更している。

華子才は、おなじ箇所をドイル原文に沿いながら、ソルテフ支部を省略する。しかも、ロビンソンに託して口頭でこの場のみんなに伝えることに変更する。こちらも奇妙な書き換えである。

ロビンソンに対して質問が続く。リヴァディア号(the *Livadia*)という船を調査した件について。船の底は木製か鉄製か。でたために木製と答える。質問者は何も知らないのだからそれ

で納得する。突然、話題が変わる。

【 Doyle 】 “ And what is the breadth of the Clyde below Greenock? ” p.179

“ It varies much, ” I replied; “ on an average about eighty yards. ” 180頁

「クライド川の川幅ですが、グリーンロツクの下流でどれくらいですか？」 133頁

「場所によって異なりますが、平均しておよそ八十ヤードでしょうか」 134頁

スコットランドにある河川と町の名前である。リヴァディア号とは直接の関係がない。ロビンソンは、80ヤードといいかげんに答えた。実際は2,600ヤードはあるはず。

【抱一庵】「……シテ、グリーンロツク下辺り、クライドの河幅は約そ」

余「甚だ一樣ならず、然れ共平均略八十ヤード」 44頁

日訳は原文通りだといっている。だが、漢訳は異なる。

【華子才】不知此艦之闊約若干。落貧生曰。通計約八十碼。 72頁

その船の幅はどれくらいですか。ロビンソンは、平均して約80ヤードでしょうといった。

華子才は、船の話が続いているなかで突然地名が出てくるとは考えなかった。当然、船の幅が話題になっていると思い、地名は削除した。幅が約73メートルもある船とは大きすぎる。参考までにいえば、あの戦艦大和でも38.9メートルだ。いくら嘘だといっても、これはありえないとは思わなかったらしい。

Doyleは、注意深く書いている。船の底が木製か鉄製か、誰も知らない。河幅、貨物室

store-rooms (抱一庵：火器庫、華子才：貨食房)の位置についても同様だ。話のシッポをつかませないことが重要だ。ロビンソンにどうでもいい嘘をつかせている。だが、船の幅が約73メートルあると言った瞬間に、誰でもが嘘であることを見破る。そこでロビンソンの命がなくなるとは華子才は考えなかった。Doyleの工夫に気づかなかった華子才の翻訳間違いである。

突然、場面が転換しはじめる。本物の秘密党員が入ってきた。

【 Doyle 】 I am Gustave Berger, the agent from England, bearing letters from the chief commissioner to his well-beloved brothers of Solteff. p.181

わたしはイギリスの代表、ガスターヴ・バーガーだ。ソフテフの敬愛する同志に委員長のお手紙を持ってきた。 134頁

ロビンソンは、このバーガーに間違われている。イギリスに支部があるという。

【抱一庵】余は英国支部総裁より当ソルテツフ支部に宛たる至大至重の密書を齎される、『合衆無政府党』英国支部委員ガスタベ、バーガーなるを！ 47頁

抱一庵は、ここでも少しの加筆を行なっている。原文にはない『合衆無政府党』だ。おまけに「ユニオン、アナーキスト」とルビをふって念を入れた。どうしても補足したかったらしい。

【華子才】吾遜斯推名 培迦姓 為英倫之使者。致信於掃而塔夫諸弟兄者是也。 73頁

私ガスター(名)バーガー(姓)はイギリスの使者である。ソフタフの諸兄に手紙を持ってきた。

欧米人の姓名表示が中国とは異なることを示

すために「名」「姓」を使用する。当時の漢訳では珍しいことではない。ここは華子才の方が抱一庵よりも原文に近い。

こうしてロビンソンの成りすましが露顕してしまった。バーガーが解雇を宣言する。解雇の意味を理解しているロビンソンは、斬りつけてくるバーガーに向けて拳銃の引き金を引いた。

【ドイツ】A man sprang at me. I saw along the sights of my Derringer the gleam of a knife and the demoniacal face of Gustave Berger. Then I pulled the trigger, and, with his hoarse scream sounding in my ears, I was felled to the ground by a crushing blow from behind. p.183

一人、跳びかかってきた。わたしが握っているデリンジャーの照星の向こうにきらりと光るナイフとバーガーの悪魔のような顔が見えた。私は引き金を引いた。バーガーのしわがれた悲鳴が聞こえた。そのとたん、わたしはうしろからなぐられ、床にくずれおれた。136頁

デリンジャーは、手のひらにはいる小型拳銃。一瞬間に連続して発生した激しい動きをよく描写している。緊張感が読者に伝わってくる。ここで重要なのは、ロビンソンが銃の引き金を引いて弾がバーガーの顔に命中したことだ。

【抱一庵】一個の人、余に踊り懸かれり、余は吾ピストルの銃身に沿ふて、ガスタブ、バーガーの恐ろしき顔と、渠が振翳す白刃の閃めきとを瞥たり、余はヒキガ子を控けり、余はバーガーの叫喚を耳にしつゝ、背後より来る一打の下に床に倒れぬ 50頁

デリンジャーこそ翻訳していないがそのほかは原文のままといつていい。

華子才は、どうか。

【華子才】培迦拔刀欲前。落貧生方欲開鎗。驟覺身受一重擊。即昏仆於地。74頁

バーガーはナイフを抜き近寄ろうとしている。ロビンソンは発砲しようとしたとたんに身体に衝撃を感じそのまま地面に昏倒した。

ロビンソンは拳銃の引き金を引いていない。原文が表現した迫力には遠く及ばない。

警察がニヒリストのアジトを急襲して事件は解決した。助かったロビンソンは昇進した。

抱一庵は、昇進は抜きにしてほぼ原文通りに訳し終えた。

ところが、華子才の漢訳は少し異なる。ロビンソンは商談をまとめたあと、イギリスに無事にもどりディクソンに報告した(即安帰英倫。報速克孫命)。

華子才は、ロビンソンがロシアのオデッサ支店に勤務していることを忘れたらしい。短篇小説であるにもかかわらず首尾一貫させることができなかった。

『小説林』第3期(丁未三月)に掲載された「新書紹介」を以前に紹介した。英語原文から直接漢訳したことを言っていた。それだけのことだ。英文より直接漢訳する方が、日本語からの重訳に比較して優れていると考えるのは、誤った推測であることがわかるだろう。 罫

注：参考文献は最後にまとめて掲載する

【注】

8) 「一」を翻訳した林蓋天については、樂偉平『小説林社研究』上下(台湾・花木蘭文化出版社2014.3 古典文献研究輯刊18編 第18、19冊)の168頁「31」に名前が見える。どうしたわけか華子才は採録していない。

9) コナン・ドイル作、笹野史隆訳「ニヒリストたちとの一夜」『北海文学』85 1999.4.1

漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序 1
「区別がつかない論」再び

樽本照雄

ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) は、英国の劇作家、詩人である。戯曲(脚本)は他人との合作を含めて38作、また「ヴィーナスとアドーニス」「ルークリースの凌辱」などの物語詩および154首からなる「ソネット集(十四行詩)」ほか知られている。

劇作家と詩人に区別する

シェイクスピアを称して劇作家、詩人だというのは、一般の辞書、書物にも記載されているとおりだ。さらにいえば、俳優兼座付き作家、劇場の株主でもあった。名前だけは知らぬ者がいないほど有名な演劇人である。

注意点がひとつある。普通に劇作家と詩人を並べて書いている。戯曲を書いたから劇作家、「ソネット集」などの詩を作ったから詩人と区別しているように見える。俗耳に入りやすいから容易に誤る。

現代の研究者黄焯結(2008)*1は、シェイクスピアが劇作家(現代漢語でも同じ)であることを強調する。黄が先行文献からシェイクスピアの肩書き、あるいは呼称だけを抽出したその意図は、過去の中国人がシェイクスピアをどのように見ていたかを検証するためだ。

「英国の詩人(英国騷客)」「英国のもっとも

名声のある詩人(英国最良声名之詞人)」「英国のもっとも著名な詩人(英国最著名之詩人)」「比類なき名優(絶世名優)」などと列挙する。

それらが多くは詩人と表示していることについて黄焯結は、シェイクスピアの「劇作家であるという身分については曖昧にしている」と不満を述べる。詩人ではなく劇作家と書くべきだと黄は主張する。

ここから、シェイクスピアを劇作家と詩人に区別する考えが、黄焯結の中で「常識」(以下において俗論と称する)として定着していることがわかる。あくまでも現代の知識にもとづいて言っているだけ。この点について疑問を感じていないらしい(後述)。

彭建華(2012)*2は、それと微妙に異なる。シェイクスピアの肩書きを抜き出すのは黄焯結と同じだ。しかし、言うことが黄とは反対なのだ。先行文献が「劇作家」という単語を使っていないにもかかわらず次のように結論する。「要するにシェイクスピアは主としてやはり劇作家と見なされており、詩人ではなかった(総言之、莎士比亞、主要還是被看作劇作家，而不是詩人)」

そうならばシェイクスピアはなになのか。彭建華は続けていう。「シェイクスピアは英国の偉大な(詩体)劇作家および詩人であったが、林紓はシェイクスピアとその戯曲についての認識があやふやだった(莎士比亞是英国偉大的(詩体)劇作家和詩人，但是林紓对莎士比亞及其戲劇的認識是模糊的)」

彭建華は、シェイクスピアについて劇作家と詩人にどうしても区別しなかった。原文のママとした「詩体」とは、詩の形式という意味だ。詩の形式をもった戯曲が詩であるとは考えないらしい。彼も現在の区別を過去の林紓に押し当てて「認識があやふやだった」と恣意的に非難している。

黄焯結と彭建華に代表させたが、研究者の多くにこの俗論 劇作家と詩人を区別する、は

深く広く普及している。あとで問題にする。

詩人と劇作家

現代では、詩人には英語の poet を、劇作家には playwright あるいは dramatist を当てるのが普通だ。playwright は、作劇職人という意味であって playwrighter ではない。

そもそも playwright とは、ベン・ジョンソン (Ben Jonson, 1572-1637) が1616年刊行の『^{エピグラムズ}警句詩集』において否定的に使用したという。ベン・ジョンソンはシェイクスピアと似た経験を持っている。彼自身は、詩人 poet だと自任していたから、それから見れば作劇職人は格下という意識だった。1616年はシェイクスピアの没年に重なる。

ただし、O.E.D.1989年版では、playwright の初出は1687年である。そこにはベン・ジョンソンの名前はない。また、dramatist にしたところで、同じくO.E.D.同版によれば、その初出は1678年となっている。いずれもシェイクスピアの死後だ。彼が生きた時代において劇作家は無縁のことばだった。

基礎となる知識を簡単に説明しておく。文字通り常識に属するものだが確認するために書く。

シェイクスピア(詩)とラム(散文)

大きくふたつに分かれる。詩 verse と散文 prose だ。

詩は韻文である。シェイクスピア劇(以後、莎劇と称する)は無韻詩 blank verse (弱強五歩格。脚韻を踏まない韻文)で書かれているからこれも詩である。ゆえに莎劇は詩にほかならない。明確にするため必要な箇所では「莎劇(詩)」と表記する。

私は以前の論文*3で林紓が説明するシェイクスピアの「詩」は「戯曲」であると指摘した。今もその考えに変化はない。今回、表記に上のような工夫を加える。その方が実態をより反映しており理解しやすいと思うからだ。さらに、

本稿において、莎劇(詩)は印刷され書物となった脚本のことを指す。

シェイクスピアは詩人 poet と呼ばれる。当然のことだ。ベン・ジョンソンが否定的に表現した playwright (作劇職人)がシェイクスピアに適用されるはずもない。だからこそ、シェイクスピアを劇作家 playwright と表記するのは最初の否定的な意味を失った現代から見れば、という前提、注釈が必要になる。シェイクスピアの死後、彼の作品を改作、翻案する人がいたのも事実だ。名前も伝わっている。

無韻詩(韻文)で書かれた莎劇(詩)にもとづき、ラム姉弟は散文を用いて小説に書き直した。それが『シェイクスピア物語 Tales from Shakespeare』1807である*4。以下においてラム本とも書く。以上をまとめて表にする。印はその方向に変化したことを示す。

シェイクスピア	ラム姉弟
詩 verse、韻文	散文 prose
無韻詩 blank verse、戯曲	ラム本、小説

詩(戯曲)と散文(小説)が対立する。常識ではあるが、あらためてご留意いただきたい。

漢訳ラム本など

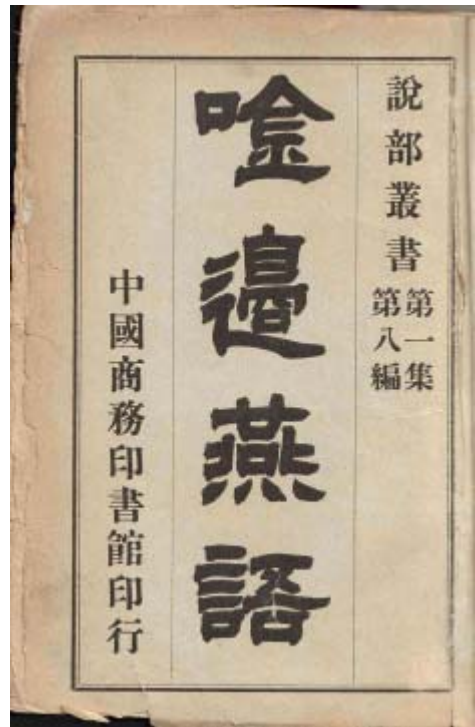
1903年(未確認)、訳者不記でラム本の漢訳が最初出版された。つづいて1904年に林訳がでた。1903年刊行が正しいとして、時間差一年前後というのは、両書の出現はほとんど同時といってもいいだろう。

前者の漢訳は、英国索士比亜 Shaksper 著(蘭ト散文)訳者不記『瀕外奇譚 Tales From Shaksper』(10作所収。上海・達文社*5 [光緒二十九(1903)年十一月]手元の複写本には奥付なし、刊年不記)である。

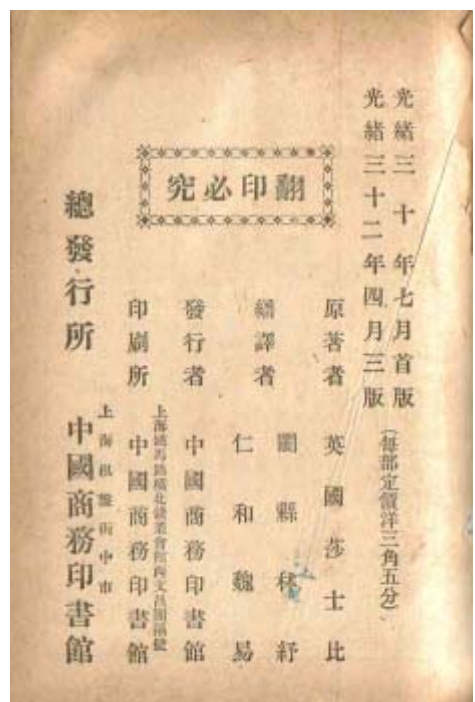
Shaksper は Shakespeare の間違いだといわれるかもしれない。だが、シェイクスピアの表記にはもともと複数が存在する。そう綴る英語書



後者の漢訳は、林紘・魏易共訳の英国莎士比亞著『英国詩人吟辺燕語』(全20作所収)だ。光緒三十年十月刊行のものが記録されるが未見。私が所蔵する版本には、上海・中国商務印書館 光緒三十(1904)年七月首版/三十二(1906)年四月三版 説部叢書第一集第八編と印刷されている。



籍がある。誤りではない。「蘭ト散文」と補充表記したのは、序文に「英国の学者ラムによって散文にされた(経英儒蘭ト行以散文)」と説明しているからだ。



ふたつをまとめて漢訳ラム本2種と称する。

中国では、後者の林訳をめぐるおおよそ次のようなことがあった。

林訳は、シェイクスピアを莎士比と表記し、英語は示さない。ラムの名前もない。また林紘らは、ラム本を底本にしたことを説明しなかった。刊行から14年後の1918年、ここを文学革命派の劉半農らが見つかった。林訳に対して非難攻撃を展開したのは周知のとおりだ。彼は、「林先生は「詩」と「戯」のふたつを識別していない」と罵り、さらに重ねて「豆と麦の区別がつかない(不辨菽麦)」と書いて嘲笑した。私はそれを「区別がつかない論」と言っている。

1924年、鄭振鐸は林紘追悼の文章を発表した。鄭は、劉半農の林紘批判を継承する。その時、字句に細工をほどこした。理由を説明しないまま根拠となる翻訳作品を入れ替えたのである。『吟辺燕語』を取り下げ、そのかわりに別の林訳シェイクスピア作品とイブセン作品を掲げて同じように罵った。すなわち「小説」と「戯曲」の区別がつかない、である。鄭振鐸の細工は巧妙だった。誰も気づかなかった。私が鄭のことを「評論の魔術師」という理由だ。

まとめる。劉半農は「詩」と「戯」を対比させた。鄭振鐸は用語を変更して「小説」と「戯曲」を使用した。

用語は異なるが、彼らが林訳を非難攻撃する基本姿勢は同じだ。林紘たちが原作の戯曲を勝手に書き換えて小説に変身させたと責めたのである。戯曲と小説、文芸作品の種類について知識を持たない、無知である、区別がつかないという意味だ。

彼らが林紘に浴びせた嘲笑慢罵は、そのままもどってきて劉半農および鄭振鐸自身を引き裂くことになるうとは想像もしなかつただろう(後述)。

作品集ではなくシェイクスピアの単独作品ならば、1903年に「ヴェニスの商人」が周桂笙によって漢訳されている。漢訳名は鍵語そのまま

の「一斤肉」だ。シェイクスピア名なし。大幅な削除がある。底本がラム本なのかどうかは不明*6。



孔夫子旧书网より

1903、04年当時の中国人が、漢語の翻訳で実際に莎劇の舞台を見ていた、あるいは長詩をこれも翻訳で読んでいたかといえ、そういう事実はない。

例外はある。1902年に上海の学生が英語で「ヴェニスの商人」を上演したという*7。それを見るかぎり、上海における一部の大学生の範囲内にあったできごとだ。英語を理解する知識人たちのものだった。しかし、英語を理解しない一般の中国人とは無縁だ。莎劇は、それまでの中国では舞台にのぼったことがない、漢訳も存在していなかった。本稿はそういう時代の中国を対象にしている。

中国において公表された脚本形式での翻訳は、

早いものでは、(英) 莎士比亞著、包天笑改編「女律師」4幕(『女学生』2期刊年不記/城東女学編印宣統3(1911))になるらしい。「ヴェニスの商人」だ。ただし、これは戯曲形式とはいえ、包天笑が『吟辺燕語』をもとにして脚本化したという*8。

莎劇(詩)そのものが漢訳される前に、中国人の間では、漢訳ラムの小説『吟辺燕語』が先行し、それに基づいて脚本が書かれ上演もされた。珍しい展開だ。

あるいは、1914年の亮楽月記「剗肉記(ヴェニスの商人)」があるという*9。

それらの作品のいくつかは、中国では長らく埋もれていて誰も注目しなかった。それ以前の1903、04年当時にとっては、シェイクスピアもラムの名前も一部の知識人だけが知っていたにすぎない。一般人にはほとんど無縁のシェイクスピアの名前と莎劇だった。そういうところで、漢訳ラム本が突然2種類も出現した。漢訳者が序文を書いて中国人に向かってなにをどう説明しているのか興味を感じる。

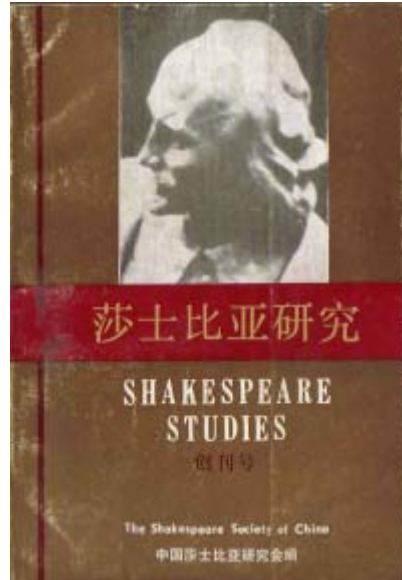
本稿の主目的は、漢訳ラム本2種の序文に出てくるシェイクスピアに関する単語について考えることだ。莎劇(詩)とラム本に関する漢訳者たちの認識がどうだったのかを確認するためである。区別しているのか。あわせて劉半農、鄭振鐸らの林訳批判、すなわち「区別がつかない論」を再度検討する。

シェイクスピア名の漢訳と肩書き

1903年以前の中国におけるシェイクスピアの受容状況について話題をふたつに絞って取り上げる。

シェイクスピアという名前の漢訳はどうなっているか。もうひとつは、肩書きがどう書かれているかだ。

戈宝権(1983)*10は、シェイクスピアが宣教師によって中国に紹介されたのは1856年が最初だとする。



それに対して郝田虎(2010)*11が、別の資料を提出しそれ以前に例があると指摘した。

それらの論文はそれぞれに意味がある。ただ、中国におけるシェイクスピア紹介に関して誰が最初だろうと、本稿とはそれほど関係がない。ラム本の漢訳者たちが、それらを読んでいるかどうか。シェイクスピア名の漢訳からして異なるところから、その可能性は低い。

戈宝権が取り出したシェイクスピアに冠された肩書きと名前の漢語表記を拾い出してみよう。説明、肩書きが付いているものはカッコでくくる。

[所著詩文, 美善具尽] 舌克斯畢(1856)、[英国騷客] 沙斯皮耳(1882)、[英国一最著声称之詞人] 篩斯比耳(1885)、[詞人] 狹斯丕爾(1894)、[世稱為詩中之王, 亦為戲文中之大名家] 莎基斯庇爾(1903)、[英国第一詩人] 索士比爾(1903)、[最著名之詩人] 夏克思苾爾(1904)、希哀苦皮阿(1904)、葉斯壁(1907)、沙克皮爾(1908)などだ。本稿で検討する漢訳ラム本2種の索士比亞、あるいは莎士比とは違っている。

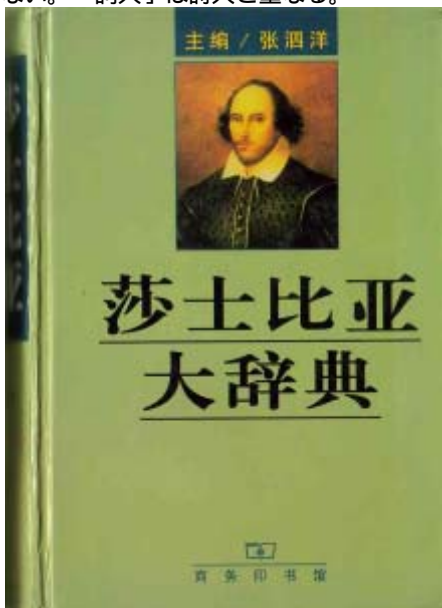
ただ、梁啓超(1902)*12が、[近世詩家] 莎士比亞と表記したのがほぼ同じ。ほぼ、であって完全一致ではない。

郝田虎がつけ加えたのは、沙士比阿(林則徐『四洲志』1839-40)だ。



また、李春江(2010)*13が西洋の伝教士による漢訳を紹介するのは戈宝権と同じである。中国人の記述を抜き出して次のとおり。郭崇燾「舍色斯畢爾，為英国二百年前善譜齣者」、嚴復「詞人狹斯丕爾」(1894)など。

「善譜齣者」は戯曲を書くのがうまいと説明しているだけ。劇作家という単語は使われてはいない。「詞人」は詩人と重なる。



張泗洋(2001)*14は、[英国第一詩人]索士比爾(1903)、[英吉利国優人]索士比爾(1903)、希哀苦皮阿(1904)などと紹介する。ここでも詩人であり俳優である。

あるいは、魯迅が「摩羅詩力説」(1908)*15で狹斯丕爾と表記して嚴復にならったといってもそれだけのこと。まず発表年が漢訳ラム本2種よりも遅れる。

私がふたつ追加する。

追加資料2件

ひとつは、蔣觀雲「中国之演劇界」(『新民叢報』第3年第17号(原第65号)光緒三十一年二月十五日(1905.3.20))だ。

シェイクスピアを次のように紹介している。

今欧洲各国。最重沙翁之曲。至称惟神能造人心。惟沙翁能道人心。而沙翁著名之曲。皆悲劇也。11頁

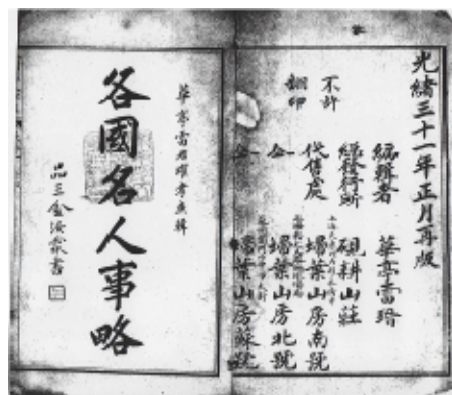
今ヨーロッパ各国では、沙翁の劇曲を最も重んじている。神だけが人心を作ることができ、沙翁だけが人心を述べることできるとまで称されている。しかも沙翁の著名な劇曲はすべて悲劇なのである。

ここに見える沙翁とは、いうまでもなくシェイクスピアである。日本では1890年代からシェイクスピアを沙翁と呼びならわしていた。

それより前に、沙比阿翁原撰、坪内雄蔵訳『自由太刀餘波鋭鋒：該撒奇談』(東洋館書店1884.5)が刊行されている。それからの流れであつても不思議ではない。

蔣觀雲がそれを知っていて沙翁とするのも自然なことだ。戯曲を「曲」で表示する。彼も劇作家という単語は使っていない。

もうひとつ加える。



華亭雷瑠編輯『各国名人事略』(硯耕山莊 光緒三十一(1905)年正月再版 石印本。扉に「華亭雷君曜孝廉輯」*16とある)にシェイクスピアを収録する。説明しながら内容を読む。



卷二十 藝術1才

脩苦吾匹亜 / 脩苦吾匹亜。為英國有名之作戲曲者。幼時在郷里学校受教育。移至倫敦而為俳優。年達三十時、受女王意色排拉之寵愛。奉其命而作戲曲。自其以莫司一世受劇場興行之免。許演其所作之黑莫西子篤之悲戲。時自上戲台而演怨靈。

「脩苦吾匹亜」は、ほかに見えない漢訳だ。シェイクスピアのことを「作戲曲者」、つまり戯曲を書く者だと説明している。ここでも劇作家ということばはない。また、生卒年には触れない。ロンドンに移り俳優をしていたのはそのとおり。ただ、30歳になった時エリザベス女王の寵愛を受けて戯曲を書くように命じられたというのは怪しい。そう紹介する文献があるのかも知れない。シェイクスピアがロンドンについ

たのは20歳代の1580年代後半のころのことだった。すでに戯曲を書きはじめている。「其以莫司一世」は、エリザベス1世(意拉色排か)の後継者、ジェームズ1世を指す。ここらあたりは、拠る資料があるのだろう。

「黒莫西子篤之悲戲」の箇所ではし立ち止まる。悲劇というのだから「ハムレット」「オセロー」「リア王」「マクベス」あたりだと思ふ。だが、どれも「黒莫西子篤」には当てはまらない。「子」が息子だとしてハムレットを示すのだろうか。だが、ハムレットの毒殺された父の名前は、やはりハムレットなのだ。「黒莫西」は音訳するとヘイモス、ヘイモシ、ヘイモヒくらいしか思いつかない。シェイクスピアの4大悲劇とは関係がなさそうに見える。

ところがそれにつづいて「時に自ら舞台にあげり怨靈を演じた」とある。「ハムレット」に違いない。その前に出てくる悲劇「黒莫西子篤」と関連しているから、それが書き誤りだと推測できる。思いつくのは「黒莫栗篤 Hamlet」だ。「西子」はあるいは漢語「栗子」からの連想で筆耕生が書き誤ったものか。すると名前の「脩苦吾匹亜」にみえる「吾」も間違いではないかを感じる。Shakespeare の「s」なら「士」「斯」「思」などが以前には使用されている。だが、「吾」では「s」とは読めないだろう。「吾」は使用しなくてもよかった。疑問を出すだけでここではそのままにしておく。

詩人シェイクスピア

漢訳ラム本2種が出てくる前後の中国において、シェイクスピアについての知識といえば、あるといってもそれくらいのものであった。短文ながら簡潔に説明していると思う。ただし、せっかく「ハムレット」を出しながら誤記する。これでは理解しろというほうが無理だ。知っている人だけが了解する。

肩書きの表記はどうなっているか。

前述のように黄焯結は、シェイクスピアの肩

書きを表わす劇作家という単語が使用されていないことを指摘し、それが不適切だと批判した。

「英国騷客」「英国一最著声称之詞人」「詞人」「世称詩中之王」「英国第一詩人」「最著名之詩人」「近世詩家」などはまとめていえば詩人である。劇作家という単語は、事実としてどこにもないのだ。前出1903年の莎基斯庇爾を説明した「世称为詩中之王」が詩を「亦為戲文中之大名家」の「戲文」が戯曲(脚本)を指すだろう。だがやはり劇作家は使用していない。ただ、詩と戯曲に分けてはいる。

参考資料のひとつとして英漢辞典の記述を示す。『商務書館華英字典』(1902)から、関連語彙を拾った。

Poet 詩人, 詩翁, 騷人, 詩字[家].
 Play to act a play 演劇
 Playwright なし
 Drama 戯曲、戯調、梨園之戲.
 Dramatist 造戯本之人.

「Dramatist 造戯本之人」は「芝居の脚本を書く人」だ。説明である。上述『各国名人略』にも「作戯曲者」と記述していた。これらを見れば、当時の中国には劇作家という漢語がまだ成立していなかった、あるいは少なくとも定着していなかったことがわかる。

シェイクスピアを表現する漢語は「詞人」「詩人」「詩翁」「騷人」「詩家」などしかなかった。というよりも、莎劇はもともと詩なのだから、その作者を称して詩人を当てるのはまことに適切である。

黄焯結が単語の劇作家を使用するように強要するのは、中国の研究者が現代の俗論にとらわれている状況を明らかにする。現代で使う語彙を過去に持ち込み、それが無いといって批判するのは論理が逆転している。過去の用例を把握して当時の状況を考えるべきだった。

漢訳ラム本2種は、それ以前の文献とは関係

が薄い。となれば、漢訳者にとってシェイクスピアを理解するためには、ラムの序文が重要な意味をもっていたはずだ。いうまでもなく、それ以外の英語文献による知識もあっただろう。英語を理解する人たちが漢訳に従事している。

ラム序文

ラム序文は、漢訳ラム本2種には収録されていない。なぜか。その内容が当時の中国人読者には向かないと判断されたためだろう。

収録されていないのだから、漢訳ラム本2種とは直接の関係はないのか。いや、そうではない。ラム序文について理解しておくことは必要だ。なぜなら、漢訳者はラム序文を知っており、自分たちの序にそれを反映させているからだ。

ラム序文は、シェイクスピアの生涯については説明していない。シェイクスピアの原文、つまり莎劇(詩)を直接読むよう若い読者に勧めるのがその主眼である。

ラムは序文の冒頭に、自分の作品を「この物語」と明記している。すなわち、Tales であり、それは prose 散文である。シェイクスピアの Plays 戯曲すなわち blank verse 無韻詩を物語に書き直したラムの目的は、シェイクスピア研究の手引き、入門にするためだと限定している。莎劇(詩)を理解するために、入門としてのわかりやすい物語に書きあらためた。およその筋をあらかじめ知っておけば、成長して本物のシェイクスピア劇を読んだとき、そのなかにラム本では省略された、より複雑で豊富な内容を理解することができる。

ラム本は児童書に分類される。中国では奇妙な批判があったのも事実だ。林紓らは中国の成人にむけて西洋の児童書を漢訳した、と。

ラムは、莎劇(詩)と物語(散文)を厳密に区別している。わざわざ書くこともない(参考までに単語の対照表を掲げた。次頁)。

表: ラム本の序文 THE AUTHOR'S PREFACE と日本語訳、漢訳の対

	1	2	3	4	5
the following Tales	此物語集	次の物語	この物語	這些故事	這些故事
Tragedies	悲劇	悲劇	悲劇	悲劇	悲劇
Shakspeare's own words	原文の言葉	シェイクスピア自身の言葉	シェイクスピア自身の言葉	莎士比亞自己的語言	莎士比亞的語言
Comedies	喜劇	喜劇	喜劇	喜劇	喜劇
the dramatic form of writing	戯曲の書振り	戯曲の文体	劇の書き方	戲劇形式	戲劇形式
prose	散文	散文	散文	散文	散文
blank verse	×	無韻詩(フランク・ヴァース)	無韻詩	自由詩体	自由詩体
wild poetic garden	玉のやうな名作	手入れしない詩の花園	自然のままの詩の花園	充滿詩意的花園	生意盎然的花園
the originals	原本	原本	原作	×	原著
these imperfect abridgments	梗概を綴つた此筋書	此の不完全な短縮された物語	この不完全な短く纏めた物語	×	不完美的縮写本
the Plays at full length	原本	戯曲	シェイクスピアの原作	×	莎士比亞原著
the true Plays of Shakespeare	沙翁の戯曲	シェイクスピアの真実の戯曲	シェイクスピアの本当の劇	莎士比亞原来的戲劇	莎士比亞的戲劇

- 1 チャールズ・ラム著、小松武治訳『沙翁物語集』日高有倫堂 1904.6.12 / 1906.2.5訂正六版
- 2 チャールズ・ラム、メアリ・ラム著、野上彌生子訳『沙翁物語』岩波文庫 1932.6.1 / 1952.4.20十八刷
- 3 チャールズ・ラム、メアリ・ラム著、村岡勇訳『シェイクスピア物語』角川文庫 1952.7.30 / 1966.8.30二十四版
- 4 査爾斯・蘭姆、瑪麗・蘭姆改写、蕭乾訳『莎士比亞戲劇故事集』蕭乾訳策全集 西安・太白文藝出版社 2005.1。部分的に省略がある。北京・中国青年出版社1956.9 / 1983.4北京第六次印刷も同じ
- 5 査爾斯・蘭姆、瑪麗・蘭姆改写、傅光明訳『莎士比亞戲劇故事集』台湾商務印書館股份公司2013.4

前述のように、漢訳本は2種ともにラム序文は収録していない。そのかわりに漢訳者の序がある。

莎劇は無韻詩で書かれた芝居の脚本である。それをラムが小説にした。漢訳者たちは、この事実を認識していたのだろうか。これが注目点である。中国ではこの点をあいまいにしたまま研究者たちは序を読んでいる。読んでいるというよりも、自分に都合のよいように恣意的に解釈する。研究者が各自で読み検討するまえに、立論の前提として戯曲と小説の「区別がつかない論」が存在している。それが一般化している

ように思う。

「瀕外奇譚叙例」から検討する。「叙例」と称する。 罫

【注】

- 1) 黄焯結「訳本解説：《吟辺燕語》的個案研究」『天津外国語学院学報』2008年第4期 2008.7.20。38頁。黄焯結は、該論文の中で林紓らがシェイクスピアの戯劇原著を文言小説にかえて訳した、とあいかわらずくり返している。41頁。戯曲と小説の区別がつかなかったと批判する。この誤った認識は中国学界において相当に深く根づいている。
- 2) 彭建華「論林紓的莎士比亞翻訳」『福建工程学院学報』第10卷第5期(総第58期)《林紓研究專刊》2012.10.8。460頁
- 3) 樽本「阿英による林紓冤罪事件 『吟辺燕語』序をめぐって」『清末小説』第31号 2008.12.1。『林紓研究論集』2009所収
- 4) 版本は以下を参照した。CHARLES AND MISS LAMB. TALES FROM SHAKSPEARE. LONDON: HENRY G. BOHN, 1843. CHARLES LAMB. TALES FROM SHAKSPEARE. LONDON: GEORGE ROUTLEDGE AND SONS, LIMITED, 刊年不記
- 5) 阿英(〔阿四〕242頁)は「光緒二十九(1903)年十一月」とする。刊年を考える参考資料として次を示す。上海図書館の目録には、達文社の刊行物は1903

- 年のものが2種類収録されている。『倍根文集』光緒二十九年九月、『野蛮之欧洲』光緒二十九年十月
- 6) シェイクスピア名不記、上海周樹奎桂笙(周桂笙)戲訳 南海吳沃堯胥人編次『新庵諧訳初編』下巻 上海・清華書局 光緒29(1903)孟夏、初出未見。海風主編『吳胥人全集』第9巻 哈爾濱・北方文藝出版社 1998.2所収。張純校点。據上海清華書局本点校收入
- 7) 葛桂録『中英文学関係編年史』上海三聯書店2004.9。126頁。それより以前の1896年に上海の St. John's University(聖約翰大学)の学生が英語で「ヴェニス商人」を演じたとある。ALEXANDER C. Y. HUANG, CHINESE SHAKESPEARES: TWO CENTURIES OF CULTURAL EXCHANGE. COLUMBIA UNIVERSITY PRESS, 2009。69頁
- 8) 董健主編『中国現代戲劇総目提要』南京大学出版社 2003.12。19頁
- 9) 朱静「新発現の莎劇《威尼斯商人》中訳本:《剗肉記》」『中国翻訳』第26巻第4期 2005.7
- 10) 戈宝権「莎士比亞作品在中国」中国莎士比亞研究会編『莎士比亞研究』創刊号、杭州・浙江人民出版社 1983.3。また『中外文学因縁 戈宝権比較文学論文集』北京出版社1992.7
- 11) 郝田虎「彌爾頓在中国: 1837-1888, 兼及莎士比亞」『外国文学』2010年第4期 2010.7 電字版
- 12) 梁啓超「飲冰室詩話」『新民叢報』第9号 光緒二十八年五月初一日(1902.6.6)
- 13) 李春江『訳不尽の莎士比亞 莎劇漢訳研究』天津社会科学院出版社2010.11。33頁
- 14) 張泗洋主編『莎士比亞大辞典』北京・商務印書館 2001.1。1254頁
- 15) 参考までに次をあげる。北岡正子『魯迅文学の淵源を探る「摩羅詩力説」材源考』汲古書院2015.6.30。
- 16) 雷君曜は、雷瑯、松江県人、1888年の拳人。掃葉山房の編集者、『申報』主筆を務めた。文娟『文学場域変革中的交融共生 掃葉山房説部及雑誌刊行研究』上海大学出版社2015.11。132-133頁。肖像写真あり。孝廉は拳人のこと

清末小説から

崔文東氏より資料をいただきました。感謝します
吳 慧堅 文学翻訳の価値: 以“詩意”開啓原

- 作的新旅程 従本雅明的翻訳觀看莎士比亞作品漢訳 『広東教育学院学報』第29巻第1期 2009.2 電字版
- 郭 楊 『林訳小説研究』復旦大学博士学位論文 2009.4.15
- 鄭 志明 《新庵諧訳初編》翻訳史価値再発現 『河北北方学院学報(社会科学版)』第27巻第5期 2011.10
- 郭 延礼 《影之花》の訳者競雄女士不是秋瑾 兼説該小説の訳者也不是曾樸 『中華読書報』2012.2.8 電字版
- 宋 莉華 美以美会伝教士亮楽月の小説創作与翻訳 『上海師範大学学報(哲学社会科学版)』2012年(第41巻)第3期 2012.5
- 龔 瓊芳 『林訳小説在清末民初の伝播研究』華中師範大学文学院博士学位論文 2013.3
- 張 雪峰 『福建近代出版史研究』北京・中国書籍出版社2015.4 万象学术文庫
- 汪 家熔 《蔣維喬日記》序 『新聞出版博物館』2015年第2期(総第27期) 2015.10
- 湯 哲声 通俗小説の性質及經典の論定 『中国現代文学研究叢刊』2016年第1期(総第198期) 2016.1.15
- 范 国富 【書評】文学史講述の可能性 評孫郁近著《民国文学十五講》 『中国現代文学研究叢刊』2016年第1期(総第198期) 2016.1.15

黄霖校注『世博夢幻三部曲』

上海・東方出版中心2010.1

《新中国未来記》導言

《新石頭記》導言

《新中国》導言

『清末小説から』第120号 2016.1.1

- いくたびかの阿英目録12 ……樽本照雄
陳家麟傳記及其翻譯小説《鮑亦登偵探案》等原著鑑定研究 …古二徳(CÉSAR GUARDE-PAZ)
漢訳『奇獄』の謎2 問題解決篇 …沢本香子
林紆文化研究(数据)庫の建立与発展困境新探
……蘇建新、劉垣